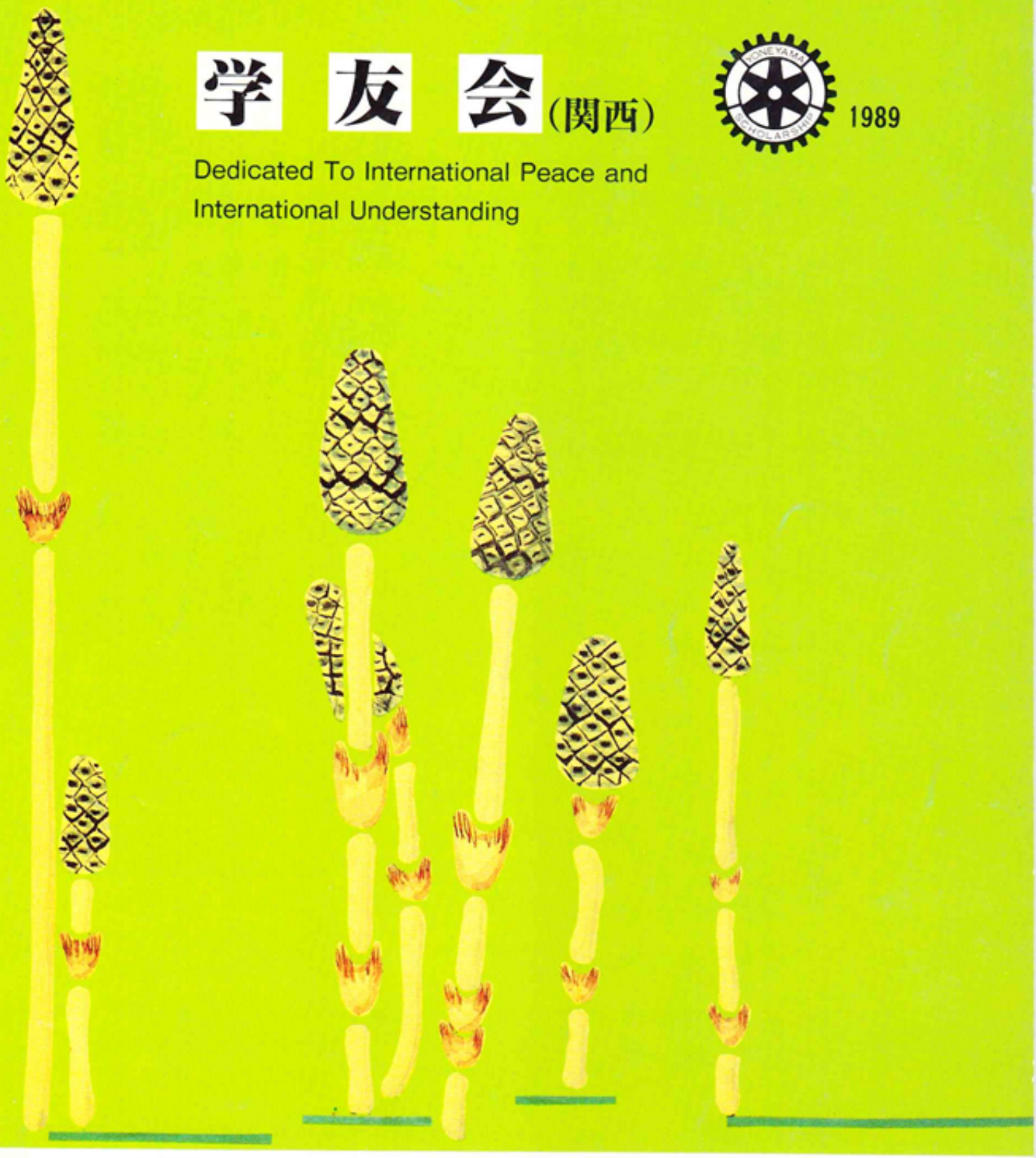
学友会（関西）

1989

Dedicated To International Peace and International Understanding



YO NE YA MA 5

目　　次

世界変革の波と文化の相互理解 …… 重光世洋 …… 1
愛が歴史を動かし政治を変えた …… 戸田　孝 …… 3
心は一つ …… 武尾敬之助 …… 4
米山梅吉 …… 種田憲次 …… 5
米山奨学生との友愛と協力 …… 世戸一夫 …… 6
1日に10本しか売らないタバコ屋のお婆さん …… 矢吹萬壽 …… 8
思いつくままに …… 保田淑郎 …… 9
私の経験から …… 池田信行 …… 10
留学生委員会委員長として …… 布川清司 …… 11
イギリスでの発見 …… 山形英郎 …… 13
善隣と和幸荘 …… 王　志安 …… 15
チュニジア …… Mohamed Hedi Zayani …… 16
冠婚葬祭 …… 文　燕友 …… 17
スリランカの女性社会について …… Dileep Chandralal …… 20
日本から見た私の国 …… 林　珠雪 …… 22
小さなお茶コップ …… 劉　泰均 …… 25
大連の正月過し …… 石　若一 …… 26
ネパール王国 …… Mana Baba Shrestha …… 27
What Is Brazilian Culture ? …… Sarkis Sergio Kaloustian …… 28
India …… Ajay Sharma …… 30
私が日本での留学生活の間に感じたことについて …… 郭　信子 …… 32
新時代 (New Era, New Age) …… 魏　栢良 …… 33
米山学友会　IN ACTION …… 黄　承国 …… 35
米山奨学生学友会（関西）の1989年度活動報告 …… 39
米山学友会　NEWS …… 40
《米山記念奨学会に対する意見》－アンケート調査 …… 千　文奉 …… 41
米山奨学生学友会（関西）役員名簿 …… 43
編集後記 …… 45

表紙について：「つくし」米山ＯＢの 姜 淑子さん（京都市立芸大大学院修了 美術専攻 現在フランス留学中）の作品です。
挿し絵について：韓国の美大で西洋画を専攻されました姜 京希さんの作品です。大阪府大留学生・米山奨学生 劉 泰均氏のご夫人でもあり、今回特にご協力をいただきました。

世界変革の波と文化の相互理解

米山学友会（関西）
会長　重光世洋
大阪産業大学工学部教授
（大阪大東R.C）

平成元年（1989）もあと残り少なくなって参りました。この年を振り返って見ますと、まず日本国内では「マドンナ旋風」が政治の世界で吹き荒れ捲くった年といっても過言ではないでしょう。私の所属する職業団体である土木界にもこの旋風が席捲し始めております。一般的に、土木屋に対するイメージはなんとなく柄の良くない労働者が集まって集団で従事する職業をもつような人々としての認識しかされていないのが残念に思います。さらに、マスコミの先生方の土木に対する認識の不十分さによって益々その好まざる悪いイメージを加勢していることにもよりましょうか。なぜならば、なんらかの社会的な問題発生時には土木作業員や建設作業員という活字が主役で大々的に報道されるからであります。それはまた、土木事業は主に社会経済基盤を構築するダム、橋、道路、上下水道などのような公共施設を対象とする社会事業に関係しているからでありましょう。土木屋は建築屋とは違って、いち個人で作品を完成させることが稀れで、どうしてもグループの力でないとできないからであります。それは、公共構造物は国民の大切な税金を使っているから、そう簡単にクラッシュ・エンド・ビルト（crush and built)ができないからでありましょう。したがって、問題が発生すれば広範囲に派生せざるを得ないのが実情であります。そこで、建設業界では、そういった世論的な悪いイメージを払拭すべく、マドンナたちの土木への進出を期待し、その繊維な美的センスを大いに参画できる諸策を真剣に講じています。経済成長期において経済性や機能性のみを対象としてきた公共構造物の建造は今日では豊かな生活環境の創出へ転換するべく、機能美や環境にマッチする景観の構築にと全力を注ぐべく努力が払われています。

大体土木屋は全般的に自己PRが苦手といった習性の持ち主が多い。また男性群はものを造るのは得意であるが、女性のようにそれをはぐくみ育てるのが不得意だからでありましょう。責任回避をさけられなくなった昨今、人類の半数を占めるマドンナのそういったセンスのある力を借りなければ、いや協力をお願いしなければならないのが本音であります。

国際的には、21世紀への変わり目を間近に控え、世界は非常に大きな変革の節目を迎えようとしております。民主化の波、それは人権の尊重を基本とする巨大な津波の襲来であり、そのもつエネルギーは膨大で阻止不可能にまで増大しつつあります。これまで確固で絶対と思われてきた枠組みが揺らぎ始め、太陽系の中で唯一緑のある地球社会は一段と混沌の度を増してきているようにも見受けられ、また、なにがしかの政治、経済そして文化のダイナミズムがこの世界社会を動かしているようにも見受けられます。このことは新しい国際状況の再編成の模索時代を迎えようとしているからでありましょう。それは国境を越えて発展するグローバリゼーションの傾向とは不可分の関係にある巨大な変革の波でもありましょう。さらに、社会、文化の分野においても、技術文明が急速に発展する一方、

炭酸ガスによる温暖化、フロンガスによるオゾン層の破壊、熱帯雨林の乱伐による酸素供給系のアンバランス、海の砂漠化、生態系の変調や絶種などのような地球規模の環境問題の深刻化など、地球社会を巻き込んだ多くの課題を提起しております。

新しい世界秩序と豊かな共存共栄の環境を構築するには到底一朝一夕でなしえる業ではありません。それには先ず、各分野、地域、国においてお互いに主張、理解、譲り合うことから始めなければなりません。かかる視点から、本号はそのささやかな試みとして、とくにふる里の文化を主題に取り上げ、世界変革の波に乗って、互いの文化に対するPRと理解を少しでも深めようという趣旨で編集をしてみたものであります。この意を少しでもお汲みいただいてお読み下さればこの上ない喜びであります。

最後に、御多忙中にもかかわらず、御寄稿賜りました諸先生、学友の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げますと共に、会報の印刷及び作成に際し物心両面より惜しみない御支援をいただいたロータリアンの皆様方に対し感謝の意を表します。

愛が歴史を動かし 政治を変えた

（財）ロータリー米山記念奨学会
米山学友委員　戸　田　　孝
D.266　パストガバナー

「チェリー・パーカーの熱い冬」が大阪城南RC会員の濱田三弘氏から届けられました。

太平洋戦争で約30,000人の犠牲者を出したオーストラリアにとって日本は憎みても余りある国でした。18才の衛生兵ゴードン・パーカー君は日本へ進駐して16才の広島原爆の被爆者桜元信子さん（チェリー）と出会い筆舌に盡せない苦難を越え、６年の歳月をかけてオーストラリアの法律を変え、黄色人種を受入れない長い歴史を変えて昭和27年「戦争花嫁第１号」としてオーストラリアへ温かく迎えられました。

これを契機に約600人の日本女性とアジアの女性がこれに続き幸福な道を歩むことができたのは若い一人の兵士の「人間愛」に根ざした勇気と忍耐の行動によって一国の法律を動かしたばかりか、戦後冷えきった日豪関係を好転させる貴重な節目の役割まで果たした素晴らしい行為によるものでした。

濱田三弘さんは中学時代パーカー君と起居を共にした親しい間柄であり、日本人に知られていない「勇敢で誠実な若い２人の血の滲むような愛の軌跡」を世に出したいとの願いでこの出版に協力されたのです。私はこの話に深い感銘を受けました。

そしてパーカー君の言葉「いつの時代も、先端を歩む人間には名誉と誇りの代償に、苛酷な犠牲が宿命づけられているようだ。しかし、この過程にあって多くの励まし、協力を戴いたことが私に大きい勇気を与えてくれた」に共感を憶えます。

米山奨学会は日本のロータリアンの念願「若い外国留学生への物心両面の支援によって国際理解と世界平和に寄与したい」の純粋な思いを達成するための具体的な奉仕活動であり、私達の誇る大事業であります。

若い奨学生諸君は母国を離れ、日本にあって純粋に学問に精進し、人々との交流を通じて理解を深めながら、新しい時代の先端を歩む人々でありますが、それを成し遂げるための苦しみや悩みは大変なものでしょう。その過程においてロータリアンが提供することのできる心からの励まし、協力が若い奨学生諸君に対して大きい勇気づけになることをパーカー君の言葉から知ることができるのです。それにつけても、新しい世代をつくり、先端を歩む若い人々に温かい協力ができる機会をもつ私達ロータリアンは21世紀にむけて多様化する世界をこの人々に託することができる喜びをよく認識したいものであります。

「学ぶ心さえあれば、万物すべてこれわが師である…」と教えられていますが、人間はあらゆる困難、苦痛、批判も自己啓発の機会とし、多岐にわたる人生の節目で自分の心を活性化して困難や障害を乗り越え、成長するのだといわれます。若い奨学生諸君はパーカー君が持ち続けた「人間愛によって育てられた勇気」をもって新しい歴史への挑戦に力をつくされ、ロータリアンは「人間愛を育てるための励ましと協力」を心がけたいものです。

エリートでもなく、特別な才能の持主でもない２人の若い普通の市民が歴史を動かし政治を変えたチェリー・パーカーの物語は私達に多くの事を教え、米山制度への新しい取り組みについて尊い示唆を与えているように思われます。

心　は　一　つ

国際ロータリー第266地区
ガバナー　武　尾　敬之助

関西米山学友会では本年２回目の会報第５号を発行されることになりました。会員のお国自慢などがテーマとなっています。会員相互の友情を深めるためには大変良い企画だと思います。日頃は私もなかなか学友の方達とお会いする機会に恵まれませんが紙上で語り合うことが出来ることを幸せに思っています。

私は昭和の初め頃中学迄韓国の大邱で過ごしました。私の心の故里は大邱であり、今でも時々夢の中にその少年時代が出て来ます。友達と登った郊外の山や、小魚を獲った川などです。関西に住む大邱中学の卒業生は百名たらずですが同窓会を作っています。一番下が還暦を越える老人ばかりです。韓国にも現在の大邱中学の同窓会があり、十数年来両同窓会の交流が始まりました。そして韓国の同窓会は私共日本の同窓生を先輩として敬遇してくれています。今年の９月大阪で開いた同窓会にはわざわざ５名の後輩が訪日出席して私共を喜ばしてくれました。又中学創立50周年及び60周年には日韓合同の記念同窓会が大邱の母校で開催され、日本からも数十名が招待されました。私は日本側の代表として、ハングルで書いた原稿で、韓国語で挨拶を述べました。とかく言われる国民感情などを超越して同窓という絆で結ばれての交流が出来ていることに心から感謝し、これを誇りに思っています。

米山学友に対しても私の想いは同じで、ロータリーを通じての同窓生意識を感じています。それ故又格別の親しみをもってお付合い出来るものと思っています。関西に永住される学友達は勿論のこと、勉学のために在住される皆さんにもこの関西が楽しい貴方達の心のそして第二の故里でありますように願う次第。

今年の国際ロータリーのテーマは「ロータリーを楽しもう、ENJOY ROTARY」です。国際ロータリー会長のヒュー・アーチャーさんはロータリーの２つの要素即ち親睦と奉仕のさなかに喜びと楽しみがあるのだと言っています。これを皆さんに当てはめてみると親睦を通しての奉仕の心です。即ち、Enjoy Your Life in Kansaiです。

米　山　梅　吉

（財）ロータリ米山記念奨学会
常務理事　種　田　憲　次
D266パスト・ガバナー

米山梅吉さんが生まれたのは、1868年２月４日である。和田竹造（大和・高取藩）の三男だが、５才のときに父を失い、母の里（静岡県・三島）で幼少時代をすごした。沼津中学を中途退学して東京にでて英語学校に学んだ。1887年に米山藤三郎の養子となり、その年の末、19才でアメリカに渡った。８年間、苦学をしながらウエスレアン大学（オハイオ州）、シラキュース大学（ニューヨーク州）で政治・文学・法律などを学んで1895年に帰国した時は、27才であった。翌年米山はる（藤三郎の娘）と結婚した。1897年に三井銀行に入行。1909年常務取締役になったのは、39才であった。

米山さんとロータリーとの出会いは、1917年に政府特派財務経済委員として米国に派遣された時、三井物産支店長福島喜三次（ダラスRC会員）をテキサス州ダラスに訪ねたときである。ここで初めて国際ロータリーの話を聴き、非常に興味を覚えたと言われている。

東京RCが創立されたのは、1920年10月20日で、会長米山梅吉・幹事福島喜三次24名のチャーター・メンバーであった。米山さんは、次の様な要職を務められた。

1924～26　スペシャル・コミッショナー
1926～27　国際ロータリー理事
1928～31　第70地区ガバナー
1939～40　日満ロータリー連合会会長

1940年９月に日本のロータリー・クラブは解散となった。

米山さんは、1924年３月三井信託株式会社を設立し初代社長となり1934年会長、1936年５月に会長辞任、1938年12月貴族院議員に勅選された。

また1934年には、三井報恩会を設立し、初代理事長となり社会事業と文化事業の発展を促進援助することに務められた。

1937年２月には、私財を投げ打って緑岡小学校を青山学院内に創立し、自ら校長・理事長に就任した。緑岡小学校は、1946年に青山学院に移管された。

この様に、米山さんは実業界のよき指導者として又、社会事業家として、教育思想家として奉仕の一生を過ごされ1946年４月28日78才で逝去された。

1949年３月に東京RCは国際ロータリーに復帰し、1951年にはサンフランシスコ講和条約が結ばれ、世の中が戦後の落ち着きを取り戻すにつれ、ポール・ハリスの記念事業に習って、日本のロータリーの父米山梅吉氏の功績を記念し、その遺徳を永久に偲ぶような事業を始めようという気運が当時の指導的ロータリアンの中に生まれた。

そして1952年11月に東京RCの中に米山基金（米山ファンド）の設定が発表された。これが発展して1957年９月のロータリアンの共同事業として、「ロータリー米山記念奨学委員会」となり、1967年７月に財団法人『ロータリー米山記念奨学会』となったのである。

米山奨学生との友愛と協力

世　戸　一　夫
266地区パストガバナー

ロータリーの国際交流活動の中で、米山記念奨学会制度は日本独得の活動で、日本のロータリー運動の功労者故米山梅吉氏の精神を顕彰して、アジアよりの留学生のために顕著な奉仕をして参り、この運動に参加する事によって日本のロータリアンの国際理解を深める事が出来感謝しております。私共大阪難波RCが1976年8月5日創立総会を開きまして、私が初代会長に選ばれました時に、会員の方々と相談して、当クラブの特徴の一つとして米山奨学会への寄付に最大の努力を払うよう目標をたてました。それ以来5年間連続して米山功労クラブ賞を受賞、その後も米山奨学会への寄付額は地区内でも優秀クラブとして、又、米山功労者の数に於ても沢山の会員が協力の実を示して下さいました。勿論米山奨学金を受けられたアジアよりの留学生のお世話も、友愛と奉仕の精神で会員が喜んで協力して下さいました。

1983－84年度地区ガバナーに私が選ばれました時は、当クラブ創主の功労者であり、2代目会長を努めて下さった故谷口雅彦会員が、ガバナー事務所として、南区千日前2丁目の立派な歯科センタービルの6Fの広い部屋を無料で提供して頂き、年次大会事務所も同じ所を使わせて頂いて大変感謝していますが、その前、地区委員の土屋正氏がリーダーになり、米山奨学会の韓国学生を講師として最も近い国、韓国の言葉「ハングル」を学ぶ会を始められ、現在も引続き熱心なロータリアンの方々が勉強しておられます。尚その当時米山奨学会より奨学金を受け大阪産業大学教授になられたOBの重光世洋氏を会長として、関西で始めて「米山学友会」を結成されまして、留学中の米山学生、OBの方々の友情を深め、相互理解を密にする組織が発足しました。その後発展して、関西米山学友会となり、重光氏が引続き会長を努めて下さっていることは感慨にたえません。

1989年5月ソウルでロータリー国際大会が開かれました時、私がその前より4年間日韓親善委員をしておりましたこともありまして、当クラブからも沢山の会員、家族が大会に参加して頂き、日本全体では目標の15,000人をはるかに越える多数の方々が参加して下さり感謝しています。殊に当大阪難波RCの方々かソウルに到着しました時に、お世話させて頂いた米山留学生OBの方々が家族と共に空港へ出迎え歓迎して頂いた温かい友情に感激しました。大会のプログラムの中にも米山奨学生の集いが設けられた韓日親善、国際理解に貢献出来ました事も感謝でした。

上記のような関係で、私は米山学友会の集会にもお招きを受け、アジアよりの留学生の優秀な方々と今日迄、親しく交わることが出来る事を本当にうれしく思っています。

最近に、当クラブが「米山クラブ」といわれる程の成果をあげることが出来ましたのは、当クラブの故岡本國雄会員が米山奨学委員長をされた時に「米山講」という組織を作られて、会員の多くの方々が毎年協力をされたことが大きな原動力になった事を感謝をもってご報告したいと思います。又、米山奨学生やOBの方々がクラブや、地区の行事にも色々

とご協力下さった事も、お互いの友愛と理解を深める事になったこと高く評価し感謝しています。

1日に10本しか売らない タバコ屋のお婆さん

大阪府立大学
学長　矢吹萬壽

私は今から30年前、1年間英国に留学した。ロンドンから北へ約60キロの、静かな田舎町にある研究所である。現在私はタバコを全く喫わないが、当時は大変なヘビー・スモーカーであった。研究所へ出かける途中タバコ屋に立寄るのが日課となっていた。

そのタバコ屋には、シワクチャの顔をした80才近いお婆さんがいた。どう見ても品がいいとは云えず、しかも、まことに無愛想で毎朝同じように、What could I?と云うだけである。

ところがある日、珍しくこのお婆さんが話かけて来た。「お前さん、毎朝タバコをこんなに沢山買ってゆくが、そんなにタバコを喫っていて、仕事をする時間があるのか」と。そこで私も「お前さんもタバコを売っていながら、タバコの効用をご存じないのか。タバコは私のエネルギーだよ」と云い返した。ところがお婆さんが云うには、「煙草は身体に悪いから、今日から10本しか売ってやらない」と。結局その日から1日に10本入りの箱1つしか売ってくれないのである。英国は日本とちがって、タバコは専売ではないから、どの店でも売っており、ここで買わなくても隣りの店でも買える。しかし、このお婆さんにそう云われると、その厚情に応えなければと、それ以来1日に10本とした。今日は20本くれと云うと、「何故だ」と訊ねる。明日は日曜日だからというと、2箱くれるといった次第である。英国では日曜日はどの店も休むからである。

これが機でこのお婆さんと言葉を交わすようになった。80才に近いと思われるお婆さんであったが、仲々の詩人である。雨降りの日に行くと、「お前さん、雨降りは好きかね。わしは大嫌いだ」とブスット云うが、「昨日輝いていた太陽は今は何処に行ったんでしょう」とつけ加える。お天気の日はご機嫌よく、「外をごらんよ。木の間からもれる陽射し、鳥の囀り、なんと素晴らしいことか」と大げさに喜びを表す。

そこで私も、今日はどんな挨拶をしてやろうか、と考えながら楽しみにして店のドアを開けたものだった。

留学の最大とも云うべき収穫は、地域の人びととの出会いと触れ合いではなかろうか。何時までも心に残るものがある。

思いつくままに

大阪府立大学
学生部長　保　田　淑　郎

私はアジアからの留学生、研究生を何人かお世話して来た。その都度できる限り多く我が家に来ていただき我が家の習慣、家族の生活の実態をお客と言う立場でなしに見て貰う事にしている。箸の上下し、茶碗や皿の扱いは勿論、扉や戸の開閉や言葉使いにまで及んで色々と説明をしたり注意したりする。私には２人の男の子が居るが彼等の挙動についても見習って良い所と悪い所を指摘したりもする。時には妻と意見が違って言い合いになったりする事もある。また、旅先から貰った絵ハガキの通信文に訂正をし帰阪した時に理由を説明しながら手渡した事もある。最初は神妙に聞いている彼等であるが、その内に慣れてきて彼等が認識している事との違いについて質問を受けるようになる。そうなると時には百科辞典や参考書を片手に回答するはめになる。私は1931年の夏、大阪貝塚に生まれた。その後父の仕事の都合で小学校の６年間を東京で過ごした以外は生活の場は大阪、特に堺にあった。この間16年間学校での教育を受け、この間をも含め大変多くの人々にめぐり合い、また、多くの地方へ旅もし、その中で見聞を拡げ知識を深めて来たつもりでいる。しかし、多くの人々にめぐり合ったとは言え、また、多くの地方を旅したとは言え全てではないし、出会った人々とて日本人を代表する様な人々とは限らない。しかも私は日常、自慢ではないが教科書的な生活を決してしていない。そして、先にも申し述べた通り言葉使いや食べ物に象徴される様に日本の、大阪の、堺のと言った大変ローカルな地域で手垢でべっとりと汚れた様な生活を続けてきている。と言った様に私は一人前に日本の社会だとか文化だとかを彼等に論ずるだけの充分な資格を持っているとは決して思ってない。しかし、私はそれを承知の上で厚かましくも彼等に対応してきた。なるほどそれはいかにローカル的で小さな家庭の事であるかも知れない。しかし、勉学を志し日本を選んでやって来た彼等に日本の人々の生き方、物の見方、考え方を中途半端なものではなしにしっかりと身につけてそれぞれの国に帰って欲しいと願う一念から行って来た事である。所が近年、大学の内外に色々と仕事が増えてそう言った時間を持つ事が少なくなりつつあるのが何となく気掛かりである。

私の経験から

大阪大学理学部
教授　池　田　信　行

近年は通信や交通の手段の進歩が著しく、世界各国の研究の様子を容易に、しかも適確に知り得る時代となり、留学の意味も以前とは大きく異なって来ています。それでも若い人が長期間にわたり外国の大学や研究機関に滞在することがその人にとって決定的な影響を持つことは依然として変わりないことです。

残念ながら私は学生としては外国に滞在した経験がありませんが、20数年前にアメリカのStanford大学に滞在した時のことは忘れ難いことの１つです。当時Stanford大学の数学教室には国際的に第一線で活躍する現役の研究者とともに、解析学の権威で既に停年で現役の教授を退いておられた、G. Polya教授とG. Szegö教授がおられました。両先生は毎日３時半より開かれる教室のお茶の時間にはいつも来ておられ、先生方のゲッチンゲン時代のお話を聞く機会がしばしばありました。それらの話に関連して両先生が数学の研究にとって「理論を創始した人か、その人に直接教わった人に学ぶ」ことの重要さを強調しておられたことが強く印象に残っています。一つの理論が生まれるには成果として公表されるものの他に形にならないものが数多く蓄積され、それらが次の発展の芽になることを指摘しておられるのだと私なりに理解しております。今日の日本の大学が一般的にそのような蓄積と雰囲気をどれだけ持っているかいささか心もとない点もありますし、無力な私がこのようなことを言うのは本当の所恥ずかしい気分で一杯ですが、私が知っている範囲でもそれにふさわしい研究者がおられる大学が日本にもあると思いますので、留学生の人達が両教授が指摘された様な視点を持って研究生活をおくられることを期待しています。

つぎに私自身も研究生活に這入ってからいくつかの国の大学を訪問したり、滞在したりする機会に恵まれましたが、その度にその地の自然と気候について考えさせられることが多かったように思います。数学ですからどの国でなされても同じ形式を持ち共通の言葉で進められていることは言うまでもありませんが、それを支えている数学者の気質はその人達が生活する自然と社会の雰囲気を色濃く反映しているように思います。春と秋は言うまでもなく、この湿度の高い梅雨の時期も日本の自然と日本人の生活に欠くことの出来ないものです。研究室の中の生活だけでなく、文化の底に流れる日本のもろもろの側面にも目を向けて貰えればと思います。日本の大学は外国から来た人が日本の社会と自然に積極的にかかわって行くことを助けるための制度の面で今なお不備な点が目立つことは大学関係者の１人としては心苦しい限りですが、幸い米山奨学会を始めとして多くの団体の活躍により、近年はそれらの欠点も逐次改善されつつあると思いますので、留学生の皆さんにこれらの面で日本滞在を有意義に活かしてほしいと願っております。

留学生委員会委員長として

神戸大学教育学部
教授　布川清司

最近では、研究室にいて、外の廊下から留学生同志の話す中国語や韓国語のきこえてくることも珍しくなくなった。それほどに私の勤める神戸大学教育学部における、ここ数年間の留学生の増加は著しい。一昨年に三十九人であった留学生が、今年は現時点で七十七人、その内訳は中国人四十七人、韓国人九人、台湾人五人…である。なお、本学部の留学生のなかには、毎年七・八人の日本側奨学金による教育研修留学生とよばれる学生が含まれている。ちなみに神戸大学全体の留学生総数は四三五名である。

私はこれまで留学生の指導教官になることが多く、毎年のように中国人や韓国人などの指導教官となってきたが、今年は教育学部留学生委員会の委員長となったために、より一層、留学生のかかえる様々な問題を内側から眺めることになった。委員長という立場上、留学生を世話する事務官や日本語教官などからの苦情や当の留学生自身からの要求など、両方の側からの要望をきくことが多い。そこでここでは、それらをいくつか紹介してみよう。

まず、日本側の事務官、日本語教官、指導教官、チューターなどからの苦情として、一、日本語も英語も分からない学生に、日本語や日本事情を教えるのは大変に難しい。来日までに日本語か英語を少しでも話せるようにしてきてほしい。少なくとも日本語の基本的な勉強は本国ですませてきてほしい。この点はとくに教育研修留学生に該当するので、この夏、文部省で教育研修留学生の受け入れ大学が集まった席上で要請してみたが、文部省当局の返答は、相手国にもそれぞれに事情があって、この点を強く要求できないということであった。

二、これも教育研修留学生に多いのだが、選考事情のせいか、私費留学生にくらべて潤沢な奨学金のせいなのか分からないが、勉学意欲の少ない人がいる。日本へ遊びに来たような人、アルバイトの金儲けに熱心な人、日本語の授業がむずかしすぎるのか、逆にやさしすぎるのか（韓国人の場合など）授業に出てない人、夫妻で来日していて、住む所が他の留学生とちがうために、留学生共通の行事に非協力的な人など。なかには、日本で就職を考える人などもいる。きくところによれば、教育研修留学生のなかには、文部省からの奨学金を本国の家族へ送金したり、帰国後、家を建てた人もいるという。こういう話をきくと、日頃、留学生のために真剣に努力している日本人側が失望するのも無理はないだろう。

一方、留学生の側でも、懸命の日本語学習の熱意が日本人教師に認められなくて悲しいおもいをする場合も少なくない。以前、私の指導学生であったタイ人の女子学生は絶えず、日本語教師への不満を口にし、一時は日本語教師とのあいだが険悪な状態になったこともあった。日本政府の奨学金で来日した人びとが、帰国後、反日的になるという話もよくきくが、それほど残念なことはない。物価高による生活困難、日本語学習の難しさ、日本人

側のよそよそしさ（偏見や民族差別も含めて）などが、その主要な原因ではないかと思われるが、これには日本政府側の留学生受け入れの立ち遅れ、日本語教育の不十分さ、日本人一般の非国際性などが大きく影響していることはいうまでもない。

それではこれからどうしたらよいのか。さきにあげた原因をひとつひとつ改善していく以外にないのだが、それにはそれぞれに長い時間をかけた地道な日毎の実践が必要となる。先行きの多難なことを考えると、目もくらみそうだが、そのむずかしさに目をつぶることなく、できることから少しずつ歩みを進めようと、改めて決意を新たにする昨今である。

イギリスでの発見

京都大学法学部
助手　山　形　英　郎

財団奨学生として留学中、イギリスで奇妙な光景に出会った。私の指導教授がテストの採点をしていたのである。教授がテストの採点をするのは当然だとおもわれるかもしれない。確かにその通りだ。しかし私の指導教授は、厳密に言えば、テストの採点ではなく、そのチェックをしていたのである。彼がチェックした答案の表紙には、ロンドン大学やマンチェスター大学と記されていた。あいにく、私の留学していた大学は、ロンドン大学というような一流の大学ではなく、シェフィールドという日本ではあまり知られていない大学である。私の指導教授は、当然シェフィールド大学教授であって、ロンドン大学やマンチェスター大学で講義をもっいるわけではない。つまり、ロンドン大学の学生が受験したテストをロンドン大学の教授が採点し、それをシェフィールド大学の私の指導教授がチェックしていたのである。

私の指導教授の話では、大学のレベルを一定に保つための制度であるとのことだ。イギリスでも、オックス・ブリッジという二大学が君臨しており、入学しやすい大学とそうでない大学が存在している。しかし、入る時はレベルがバラバラでも、出る時には、すなわち卒業する時には、学士はすべて学士として同じ評価を受けるとのことであった。それはそうであろう。例えば、ケンブリッジ大学の答案がロンドン大学の教授によってチェックされ、ロンドン大学の答案がシェフィールド大学の教授によってチェックされ、シェフィールド大学の答案がケンブリッジ大学の教授によってチェックされるなら、この3校間では、「優」「良」「可」「不可」の評価は均質化されるはずである。このネットワークがイギリス全部の大学にはりめぐらされており、大学のレベルはすべて同じ、少なくとも学士の評価は、どこの出身であろうと同じということになるわけである。

ただし、ケンブリッジ大学の学生は皆優秀学士を得て卒業するが、シェフィールド大学の学生はただの学士を得て卒業するということになるかもしれない。イギリスは3種類の学士号がある。ただのBachelor、Bachelor with Honors、First Class Bachelorである。そして、The Timesなどのいわゆる高級紙には「教育」の欄があり、First Class Degreeの授与者の名が掲載されるのである。私はたまたまシェフィールド大学のFirst Class Degree授与者の名前が掲載されているものを目にすることができた。それは10行もないものであって、各学科1人ずつ程度の数であった。しかしそのすぐ隣にはケンブリッジ大学の授与者が記載されていたが、文学部だけで、ページの上から下までびっしりと記されていた。こういう結果になるのもまた事実である。

しかし、First Class Degree授与者であれば、それがどこの大学の出身であっても、同じ評価を受けることになる。私の知りあいの日本語学科のイギリス人学生は、この名誉ある学位を授与された。そして卒業と同時に、某大学の講師となったのである。一方日本に目を転ずれば、すべての大学は順別化されてしまっている。そして、学位の称号よりも、

どこの出身かという方が重視されている。イギリスの制度が、そのまま日本にあてはまるわけではないが、日本の受験戦争を見るにつけ、そして無気力な大学生が多いのを見るにつけ、何とかならないものかと考えてしまう。

私にとって、ロータリー財団奨学生として暮らした1年4ケ月は、我母国日本を見る際のまったく新しい視点を提供してくれたのである。米山奨学生の皆さんも、時には批判的に、そして時には好意的に日本を観察し、国際化された眼で、母国を見直してもらいたいものである。

善隣と和幸荘

王　　志安
京都大学法学研究科博士課程（国際法専攻）

「善隣」という二つの漢字が日本語と中国語ともに使われ、辞書を引けばわかるように、隣家または隣国の仲良くすることを意味する。新聞、テレビなどにも頻繁に出ているので、なじみで、生きている言葉だと思う。だが、生活の実感と言えば、なんとなく日本語の「善隣」は隣家との良い関係を指す本来の意味を欠落していたような感じがする。

日本にきて、三年、ずっと和幸荘に住んでいる。京都のシベリアと言われる岩倉にあるごく普通のアパートで、その周辺がとてもしずかである。学校からちょっと遠いのだけど、勉強する人にとっては、最高のところである。三年の外国での生活は、「和幸」というお守りの幸運を浴びて、ほんとうに静かに過ごしてきた。だが、あまりの静かさにちょっと寂しさも覚えた。

和幸荘は町から離れたアパートではない。家並みの町にある。隣家がある。もし「善隣」が隣家との関係において、迷惑かけないという程度のことであれば、和幸荘も善隣の環境にある。しかし、善隣がこうした日本の典型的な礼儀を表す消極的なものでないはず。一般に理解されているように、善隣は積極的な行動を必要とするものです。例えば、テレビで放送されているように、皇太子がアジアのある国に行って訪問をなさっていることが、善隣関係につとめることになるという。行ってなかったら、善隣にはどうにもならないわけです。

二、三週間前、京都の木津に一日のホームステーの活動に参加した。それは、善隣ではなく、親善のものであり、つまり、留学生と日本人の交流を促進するために、木津市が積極的に計画した活動でした。三年でただ一回のチャンスというのは、ちょっと少ないでしょう。楽しい一日を日本人の家族と一緒に過ごしたが、不安をも覚えた。一日の友達のこの私のために、家族の皆さんがきっと遠慮した一日を送ったでしょう。正月或いは特別の日に使う料理が作られ、私を退屈させないため、皆が一生懸命に良い話題を捜し出して、私と交流してきた。終わって見れば、忘れることではないが、友達ができたとはとうてい言えない。なぜ計画的な活動がなければ、交流が出来ないでしょうか。隣家の門が他人にそんなに締め切っていなかったら、和幸荘に住んでいる人間も、もっと便利に楽しく日本人と友好を深めてきたに違いない。

迷惑かけないことは、偉大な礼儀教養だと思う。老子を育てた中国の風土でさえ、なかなか見られないものです。が、近隣に対する遠慮が恐いほどの冷たさを感じさせる。和幸荘は町の中にあるが、人間の社会にあるわけでないような感じがある。隣家で言えば、その正門に掛けてある「田中」、「山田」という札から家主の名前だけを知っている。その以上のことが何にもわからない。遠慮の礼儀を中国人は身につける必要があると思うが、私はやはり隣家の名前以上のことを知りたい。

チュニジア

Mohamed Hedi Zayani
大阪府立大学経済学研究科修士課程

『チュニジアの歴史』第一ページに、A. PAVY－フランスの歴史家で、チュニジアの歴史の大家でもある－は「大きな歴史はほとんど全て、日がよく照り輝く地中海沿岸で生じた。…地中海沿岸にあるチュニジアと呼ばれる地球の一つの小さな場所で、様々な文明が育った」と述べた。

そういえば、地理的にチュニジアは北アフリカにあって、地中海に半分囲まれている。チュニジアの東側にアルジェリアがあって、その東側にモロッコがある。この三つの国々は、最近リビアとモリタニアを含め、マグレーブ諸国と呼ばれている。

ふつうは、チュニジアを語ると、カルタゴ、フェニキア、ローマ、ビザンチナ、イスラームなどの文明が現れてくる。それは、チュニジアの国にみどりがたくさんあるから名付けられた。昔、ローマの“granary(穀倉)”とも呼ばれていた。実際、チュニジアの主な産業は農業であったからである。特に小麦、ぶどう、オリーブ、オレンジが多く出来る国である。現在のチュニジアの面積は約16万4000平方キロで、人口は約800万人である。テユニスはチュニジアの首都になっている。テユニスの人口は約250万人である。テユニスでは、カルタゴの古い町がまだ残っている。チュニジアの大きな町は、順番に上げると、テユニス、スファクス、スース、モナスチール、ビゼルト、ケルアン、ガベス、ハマメットなどがある。

チュニジアで使われている言葉は、アラビア語とフランス語である。又、アラビア語の一つの方言であるチュニジア語もある。

チュニジアは、1881年から1957年までにフランスの植民地政策によって悩まされていたため、今までフランスの影響をたくさん受けた。政府の形態は共和国である。経済的に、チュニジアはまだ発展途上国である。チュニジアの通貨はディナール（Dinar)で、1 Dinarは約150円である。

日本と同じように、チュニジアにも季節が四つあるが、気候は地中海の気候で、夏はdry and hot, 冬はcold and humidの特徴がある。チュニジアの古い歴史、美しい海、爽やかな空気、おいしいクスクスと親切な人々が、毎年世界から多くの人々を迎えている。

冠婚葬祭

米山学友会（関西）副会長
(D−266) 文　　燕　友
帝塚山短期大学

私のように親元を離れて暮らす者は、日頃漠然とある日突然、親の死の知らせ、危篤の知らせなどがあったらどうしようと、一度か二度くらい考えたことがあろう。1989年の8月3日は、私にとって忘れられない日である。その日、私は一時帰国していた韓国から日本へ戻ったのであるが、家に着いてから一時間も経たない内に母の危篤の知らせが来、やがて亡くなったという知らせをもらった。いまここで、母の突然の死について詳細なことを話すつもりはないが、私の人生経験の中で初めて直面する人間の死、それにまつわる儀式を目の当りにしながら感じたことを少し述べたい。

一般に、日本で韓国人のものの考え方や生活習慣などをいう時、「儒教的」という表現をよく用いる。しかし、韓国人にとっては、もはやそれが儒教的な習慣なのかどうかなどを深く考えることもないほど生活の中に浸透してしまっているように思える。「冠婚葬祭」においても事情は同じである。韓国では、仏教を政治指導理念としていた高麗時代には、冠婚葬祭が支配層、被支配層ともに巫俗的、仏教的な儀礼によって行われていたようである。後、朝鮮時代になってからは、儒教を政治指導理念として確立する目的と新しい王朝の政治的安定のために、儒教的冠婚葬祭を実施したようである。しかし、李朝の初期から後期に至るまでその理論と実践面において様々な努力をしたのにもかかわらず、儒教的冠婚葬祭が積極的に実施されてはいなかったようである。その理由としては、昔から実行してきた儀礼の保守性と儒教的儀礼の行き過ぎた形式性と複雑性が上げられている。その結果、実際には儒教的儀礼を中心にその実行の実用性と単純性を生かして行われてきたという。したがって、その中には昔からの因習と儒教的な儀礼が融合しているとみられる。現在までの断片的な研究を通して明らかになったのは、被支配階層では儒教的冠婚葬祭があまり積極的に実行されてはいなかったということである。このような現象は、基督教とともに紹介され始めた合理的な考え方の導入で一層顕著になり、その結果いわゆる「新式」というのが生まれる。それに対して、従来の冠婚葬祭は「旧式」と呼ばれるようになる。この新式は1890年代に入って生まれた「礼拝堂結婚」がその始まりらしい。同時に、1900年代には仏教界でも「仏式花婚法」というものが登場しているし、またその時すでにソウルでは専門的な礼式場（結婚式場）が出現し、教会、お寺とともに活発に利用されていたようである。一方の葬礼では、1912年の朝鮮総督府が発表した「火葬取締り規則」によって火葬場と共同墓地がソウル近郊で活発に利用されたという。その外には、基督教徒の葬礼では、喪服を着ないなどと、儒教的な葬礼の習慣を省略する傾向が強く現れるようになったといわれる。また、葬儀屋が出現し、それを営業的に専担するようになったというのも重要な変化の一つといえる。一般のこのような変化とともに、朝鮮総督府が1934年に発布した「儀礼準則」の登場は重要な事件のひとつといえる。それは、儒教の儀礼に基づいて、それを簡略化したものであったようであるがその成果の有無は明確ではないといわれる。

このような動きは、1961年に政府が主導した「儀礼準則」を通じて再び試みられたのであるが、あまり成果が上がらなかったために1969年には、「家庭儀礼準則」というのを制定したのであるが、それは儀礼準則に処罰規定を追加したものであった。人々の喜び悲しみを表現する場であるそれらの儀式にまで国が規制するということには異見がある人もいようが、冠婚葬祭に多額のお金をかけ、そのために苦しむ人たちが多いという行き過ぎた風潮（？）のためにやむを得ない選択だったのかも知れない。以後、いくつかの事項について改訂を重ねているが、なんといってもその内容の特徴は、金銭的な消耗に伴う項目について処罰規定を設けているところにあろう。

以後、家庭儀礼準則は都市生活様式に適したこともあり、かなりの成果をあげているように思える。しかし、「家庭儀礼準則」が実施された1969年、1970年代と、1989年のいま現在の韓国人の経済事情とは大きな落差がある。現在の韓国、韓国人はその当時に比べて確かに豊になったのである。当然の帰結かのように、人々の冠婚葬祭に対しての考え方は相当変わってきているように見える。かつての金銭的な負担をさほど苦に思わなくなり、贅沢と思われたことが贅沢ではなくなりつつあるのであろう。それは近年世界的にみられるレトロブームとも、または自我の覚醒などとも関係があるかも知れない。人々は、再び結婚式にお金をかけるようになりつつあるし、お葬式にお金をかけるようになりつつある。もとから、祖先を敬う儒教的な思想が根強い背景を思い出すとその成行きを想像するのはそう難しくない。

さて、この辺で葬礼の具体的な部分を少し見よう。狭い国土にたくさんの人々が住んでいるという事情は、韓国と日本は大変似ている。ところが、人間の亡骸を処理する習慣はその違いが大変際立つ。現在の日本では、土葬する習慣はほとんど無いといっていいと思われるが、韓国では、火葬があまり定着していないため、人が亡くなると、土葬が出来ないような必然的な理由を持ち合わせなければ、依然としてまずは土葬をするのである。自分の土地がある人はそこにお墓を作ったりもできるが、土地を持っていない人は共同墓地を利用するのが一般的である。そして、都会に住んでいる人達は、ちょっとでもお墓参りしやすく、できるだけ自分達が住んでいるところから近い所にお墓を作りたいと願うものの、都市の発達事情、増え続ける墓の数、土地の値上がり、さまざまな事情から、段々遠く離れる一方なのが実状である。韓国では、そのうち、お墓が生きている人間の数より多くなり、生きている人間が住む場所がなくなってしまうのではないかなどと冗談を言ったりすることもあるが、これは冗談では済まない問題に成りつつあるように思える。

以前、日本のある友人から次のような話を聞いたことがある。日本では、たとえば身内の人が亡くなった場合、葬式のしきたりなどが全然分からなくても大丈夫だというのである。その理由は、すべては葬儀屋がやってくれるので、極端な話、お金と悲しい気持ち（？）だけを用意すれば充分だというのであった。しかし、韓国ではまだまだそういうわけにはいかないらしい。今度の母の葬式に通して、何がこんなにも複雑で煩わしいものが多いのか、改めてびっくりしたのである。母は、臨終に洗礼を受けて、カトリック信者にはなったものの、葬式自体は伝統的なしきたりにしたがったものであった。大部分を葬儀屋に任せるといっても、弔問に訪れる人々への対応などは大変なものである。それには、家によってかなり違いがあるとも思えるが、うちのように、家族関係、その他の事情から昔からのやり方（いわゆる旧式に近い）でやると、家族は母を亡くした悲しみに沈む余裕などとてもないのである。弔問客の対応に明け暮れてしまって、しまいには、これが葬式なのか

お祝いの場なのかはなはだ疑問にさえ思える始末であった。また、葬式における男女の役割分担はかなりはっきりしていて、とりわけ女性の方は、台所仕事などでその負担は並大抵のものではない。上で紹介した「家庭儀礼準則」の実施などによって、かなり簡略化したはずの儀式が、依然として庶民のレベルでは、こんなにもはっきり残っているものなのかと改めて感じるのであった。

最後に、韓国では配偶者が亡くなって一方の配偶者が生きていても、喪主になるのは配偶者ではなく息子である。母が亡くなって父が生きていても喪主は父ではなく兄であったという事実が、伝統的な儒教的考え方からかけ離れている者にはなんとも不思議に思えるしきたりであった。その上に、実の娘であっても表に出ることはないらしい。弔問客に対してのお礼の手紙をみると、文面の最後に書かれている名前は、息子と娘ではなく娘の代わりに婿の名前が並んでいて、配偶者の父と娘達の名前はどこにもなかった。ついでに、お返しの習慣について少しふれておきたい。日本は結婚のお祝いに対してのお返しなども含めて何かにつけて、実にお返しの習慣が多い国のように見える。現在のようなお返しの仕方、その習慣が形成されるまでには、生活様式の変化も含めて社会的な変化に関係があるように思えるので、その結果のみを見て云々するのはどうかとも思える。が、その詳細なことは別の機会に考えてみることにして、ここでは香典返しの習慣に限ってみると、韓国では日本で見られるような香典返しの習慣はない。家によって程度の差はあるものの、弔問に訪れた時の接待（？）と文面によるお礼の挨拶状で終わるのが一般的な習慣である。日本の香典返しの習慣を知ったときには何か納得しにくい部分もあったが、いま改めて考えると、それなりの合理的なところもあるように思える。韓国でもいまより核家族化、都市化が進むと日本のような習慣がいずれ生まれるかもと、思う次第である。

スリランカの女性社会について

米山学友会（関西）
幹事　Dileep　Chandralal
神戸大学文化学研究科博士課程

スリランカの最大の都市コロンボの中にある一番大きな公園の名前はウィハーラ・マハー・デーウィー公園です。ウィハーラ・マハー・デーウィーはスリランカの歴史のなかで有名な皇后の名前です。彼女はスリランカの国家的英雄の一人であり、特にシンハラ人の仏教徒にとって理想的な女性です。

習俗によって女性を祭り上げるところもあります。家族が伝染病にかかるなどの不幸があったとき「パッティニ・アムマ」という女神をお祈りする習慣がそれの一例です。その儀式を行うとき、パッティニ・アムマの代表として、母になった七人の中年の女性に対して、お布施を上げるのが普通です。『アムマ』(amma)はスリランカのシンハラ語で「母」という意味です。

こうみると、スリランカでは女性の社会的地位が非常に高いように見えるかもしれません。しかし実は、スリランカの女性の地位は「二重構造」になっいます。社会的地位は高いのですが、家庭的地位はそうではありません。

夫婦になった多くの人々が、最初に生まれる子は男の子になってほしいと望んでいます。女の子が生まれたら、親の負担が重過ぎると言われます。それは社会制度のせいです。特に結婚に関して、女性を不利な立場におく事柄の一つとして、『ダウリ』と呼ばれる持参金制度があります。スリランカでは、持参金は見合い結婚の場合新婦側から新郎側へ贈られるもので、新婦側に重い負担をかけます。

しかし、教育・就職などの面では男女平等主義がよく現れています。女性だからといって学校に行かない人はいません。四年制の大学にも女子学生は男子学生とほぼ同数在学しています。医学部や法学部にも女子学生が数多く進学しています。日本の大学の文学部の中で女性の講師、教授が非常に少ないことに気が付きました。スリランカでは文学部ならどの学科にも女性の先生がいます。事務官、重役、校長などになる女性の例もそんなに少なくないのです。

政治的活動に参加する女性も少なくありません。世界で最初の女性の内閣総理大臣はスリランカのシリマー・バンダーラナーエカ夫人です。女性が結婚して家庭をもっているということは、一般の社会、教育機関、行政機関などに勤めること、または政治的活動に参加することを決してはばまないのです。かえって政治家あるいは国の指導者になるためのいい資格になります。それは、そのような女性が経験が豊かで、一般民衆レベルでの問題に通じていると思われるからではないでしょうか。

私が英語を教えている学校の女子学生のクラスで『Should women continue to work after marriage?』(女性は結婚後仕事を続けるべきか）というトピックでディスカションを行ったことがあります。すべての学生が、結婚したら仕事を辞めるというぜいたくな考えをもっていました。「最も愛する人と結婚するから仕事のことなんか考えられな

い」と言った人もいました。私の国では、結婚したからといって仕事を辞める女の人はほとんどいません。男性としてどららの方がいいでしょうか。

日本から見た私の国

米山学友会（関西）
神戸大学代表　林　　珠　雪
神戸大学文化学研究科博士課程

「人間は地球が丸いという事実が感じられない」という道理と同様に、自分の国にずっといる人達も、祖国の本当の様子を描けないと思います。

日本に来て、二年半たちました。これまで、台湾で日本に対する勉強をたくさんしてきましたが、殆んど書物上の知識であり、理解の面ではまだ浅いです。日本に来てから、実際の経験によって、日本に対しての認識がより現実的になりました。その反面、自分の国に対しても、ある距離を置いたから、もっと見えるような感じもあります。それは、日本に来る以前には思いもつかなかった収穫です。

台湾の特色を語る前に、まずその歴史を振り返って見たいと思います。周知の通り、日清戦争で、清朝は台湾を戦争の賠償として日本に譲りました。その前、イギリスやオランダなどの諸国も、短期間台湾を占領したことがありました。台湾は清朝にとっては辺境の島で、大した存在ではありません。だから、台湾はいつも流浪の孤児と同じように、母国から離れていました。第二次世界大戦を終えて、台湾はやっと中国に帰りました。1949年、中国は内戦で、二つの政府に分かれました。そして、中国大陸は共産党によって占有されました。中華民国政府は余儀なく、台湾に移動して来ました。この時から台湾は初めて重視されるようになりました。以上の近代政治の流れから窺えるように、台湾の根元は勿論中国に属していますが、51年間の日本の統治を受けたことから、日本との縁も深くないとは言えないわけです。その他、戦後の日本と同じように、中華民国政府は台湾に移ってから、政策の方はかなりアメリカの影響を受けていますから、アメリカ風も強く吹きました。その外に、オランダ諸国の影響も見られています。建物だけではなく、異国恋愛の哀れな唄と物語もたくさん残されています。来日して初めての夏休みは、友人と一緒に長崎に旅行しました。その時感じた雰囲気は、自分の国と似たような気がします。特に、蝶々夫人の邸を見学した時に、思わず台湾のある昔の唄を思い出しました。その唄は、オランダ船員と恋愛していた少女の純情を描いたものです。同じく異国恋愛のものの哀れを訴えていますが、蝶々夫人の華麗なオペラと比べたら、勿論比較できない程、庶民的な感覚です。しかし、その素朴さはちょうど台湾民衆の代表的な気性だと思います。次はその素朴をたどりながら、「台湾人」の意味を尋ねたいと思います。

「台湾人」の意味は歴史の流れに沿って見れば、三つの段階に分けられると思います。第一の段階は漢民族がまだ台湾に移住しなかった時期を指したいとおもいます。その時、台湾人は今の高砂族だけです。民族学の研究者によれば、彼らの人種や音楽はインドネシヤとマレーシア諸島に属しており、そこからやって来た人達と推定されています。彼らは、台湾の原住民で、もとは海岸ぞいの平原に生活していましたが、漢民族がやって来てから、山間部へ追われ、大部分の高砂族は今もなお、山間での生活を続けています。昔からの生活習慣と伝統は、経済の発展と時代の流れの中で、徐々に現代化されつつありますが、そ

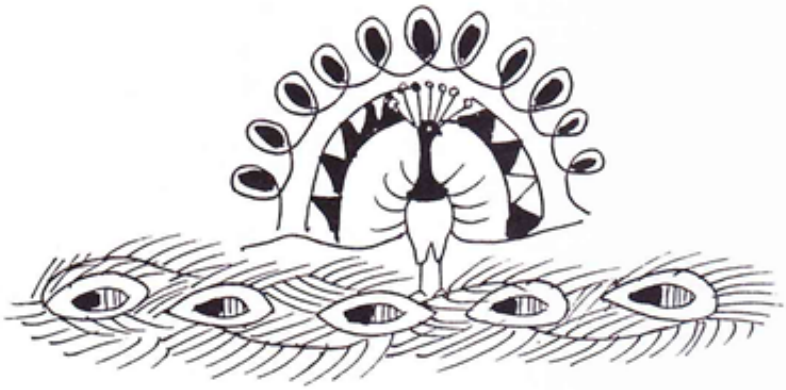
のユニークな服装と様々な伝統的な祭りは、やはりエキゾチックな雰囲気にあふれ、台湾観光の人々の人気を集めています。例えば、高砂族の中のアミ族は、その華麗な民族衣装のほか、毎年の収穫を祝う豊年祭とそれに伴う舞踊も非常に有名で、それは見事なものです。（台中にある九族文化村では、高砂族の代表的な九族のものを展示している外に、定期に様々な伝統的歌と踊りのショーも行われています。）高砂族は台湾において少数民族ですから、政治上の権利は差別されないかも知れませんが、他国の少数民族と同じように、心理上の被差別感を持っています。日本に来て、あるアイヌ人を主人公とする小説を読み、日本の友人から聞いたところ日本においてのアイヌ人や部落民は、現在でもある程度差別されていることを知って来ました。このことは自分の国にいる高砂族たちのことを思い出させました。漢民族が台湾に移住してから、まだ二百年にもならず、自らが台湾を伝統と文化の上で代表する民族であるという意識はまだありません。しかし、高砂族に対しては、明確な差別意識はないものの、漢民族としての「中華」の文化を背景にした若干の文化的優越感を抱いている点については否定できないでしょう。

第二の段階においては、台湾にやって来た漢民族を中心にしようと思います。ほぼ清の代－明の時代から、中国人はすでに続々台湾にやって来ました。この移動の風潮が、一番盛んになった時期は、清末頃でした。今、台湾に定住している庶民たちの祖先は、大部分中国大陸南部の福建省からやって来た人々です。当時の中国の生活環境は悪くて、貧しいものでした。人々は余儀なくされて、自分の故郷と近い台湾にやって来て、開墾という活路を見つけようとしました。彼らは、涙を堪え、血と汗をながして、家族と子孫のために新天地を開いた辛酸史を代々に伝えて来ました。私の祖先もこのような経路によって台湾に移住しました。だから、小さい頃、よく祖父からいろいろな台湾を開墾したときの物語を聞きました。高砂族との戦い、塩さえ足りないほどの食生活、いずれも危険と困難に満ちたことです。そして祖父は常に、祖先の苦労を無駄にせず、恥ずかしくないように、努力するようにと論しました。勿論日本の植民地になった時期のこともたくさん話してくれましたが、意外に反発の気持ちはあまりなく、却って懐かしい感情を持っています。この点は、かなり韓国と違うところです。それはなぜか、と考えると、日本の韓国と台湾に対しての植民政策の差異は勿論のことですが、前述したように、台湾と祖国の間の特殊な歴史背景もその一因です。しかし、さらに重要な原因は、1949年頃中華民国政府と一緒に台湾に移して来た「外省人」たちとの間の軋轢だと思います。共産政権に反対して、中華民国政府と一緒に台湾に逃亡して来た人達を「外省人」と呼ぶのに対して、その前に台湾に定住した人達は「本省人」と呼ぶのです。同じ中国大陸からやって来た漢民族ですけれども、心構えはかなり違います。まず、「本省人」は、習慣として「台湾語」（即ち福建省南部の方言）を使いますが、「外省人」は、北京語を使うか、あるいは自分の方言を使います。周知のように、中国の方言は多様で、発音もかなり違いますから、殆ど外国語のように全然通じないのです。だから、「本省人」と「外省人」の間には、言葉の通じないことで起こった衝突が少なくありません。その上、台湾に対しての感情もかなり違います。定住していた「本省人」は、もう台湾を自分の故郷と考えていますが、それと反対に、「外省人」は、台湾を暫くの間避難するところとみなしています。そして、この時期において「台湾人」といえば、「本省人」を意味します。また、政治上の地位においては、表面上あまり差別はありませんが、「本省人」は政治的に、高い地位に上がれなかったことは事実です。そして、長い間お互いに意識と地域上の差別感が、存在していました。しかし、この

ような意識は、世代の交替によって、徐々になくなっていきました。従って、国際情勢の流れに応じて、台湾に対しての新しい意識が生まれてきました。そのような意識の変化に連れて、「台湾人」の意味も変わって来ました。

第三段階に入りますと、「台湾人」はもはや人種と地域に関係なくて、台湾に住んでいる人達は皆台湾人です。特に今の大統領－李登輝さんも「本省人」ですから、意識上の距離はもっと消えてしまいました。近ごろの台湾海峡両岸の人民の交流が、日々に深まって行くに連れて、台湾と中国大陸の対抗意識がだんだん薄くなって来ました。そして、このような交流によって、中国大陸に対しては想像上に止まらず、実際の理解によって、お互いの差異と自らの世界における立場も分かってきました。ですから、今の新しい世代を主導とする台湾には、新しい風が吹き始めているのです。

以上簡単に台湾の歴史と台湾人のイメージについて述べさせていただきましたが、やはり自分の国ですから、多少主観的な見方があるかも知れません。この点については、皆様の御意見をいただければ、幸いだと思います。これから、日本にいる時間はまだ長いですから、自分の専攻についてもっと勉強して行くほかに、日本と台湾のお互いの理解と交流についても、力を尽くして、懸け橋という役割を果していきたいとおもいます。



小さなお茶コップ

劉　　泰　均
大阪府立大学経済学研究科修士課程

私の机の上にはひとつのお茶コップがある。このコップは先月、ロータリークラブの行事に参加してもらった小さなお茶コップだ。このコップには「日常五心」という文句が書いてある。この文句を紹介すれば、1)「ありがとう」と言う感謝の心2)「すみません」と言う反省の心3)「おかげさま」と言う謙虚の心4)「私がします」と言う奉仕の心5)「はい」と言う率直な心等である。これら文句を書くのはやさしいことかも知らないがこれら文句通りの心を持って世の中を生きて行くのはそんなにやさしいことではないと思う。私は小学校の時、国語教科書の中で「石の顔」という物語を読んだことがある。その内容を簡単に話せば、ある村の山に人の顔が掘り付けられている石があった。昔から、その村の人々は、いつか必ず「石の顔」の人がその村に現れ村の人々のために大きな仕事をしてくれると信じて来た。その村に住んでいたある少年もその話を信じて「石の顔」を会う日をまっていながら育って来た。その少年はいつも心のなかで「石の顔」を思いながらその村のために一生懸命生活をして来た。少年は偉大な政治家、立派な実業家として成長したのではなく平凡な村の人として村で成長して来た。少年の一生はただ、村で住みながら村のためそして、自分のため真面目に生きて来ただけであった。しかし、その少年が一生を終わる時点に来て、その村の人々は彼の存在が村の人々においてどのくらい重要な位置を占めているかを分かるようになった。その少年の死の何日か前において、村の人々の一人が彼の顔と「石の顔」が同じであることを発見した。それで、村の人々は「石の顔」の話しが嘘ではなかったことと、その人があの少年にほかならなかったという物語である。私がこの小学校時の国語教科書の物語を今でも忘れないことはその物語から私自身も自分の顔は自分が作るべきであることと、自分の顔に責任をもつべきだと感じてきたためである。

私はロータリークラブの例会あるいは行事に参加する。ロータリークラブの卓話、招請客のお話し、行事の意味等の出会いを通じて私が受ける新鮮な感じは私が生活をしながら一生を表すことができる顔を作りつつある。その意味で「日常五心」と書いてある小さなお茶コップは大きなお土産であった。

大連の正月過し

石　　若一
大阪市立大学経営学研究科博士課程

私のふるさと大連では、一年中一番にぎやかな行事は何といっても正月を祝うことである。中国の休みは、日曜日以外にメーデーや国慶節など二日ぐらいである。しかし、旧正月は会社によって違うが少なくとも四日間以上連休できる。土曜日休みなしで平日に休むことも少ない中国勤労者にとっては、非常にありがたい休みとなる。

日本と違って、中国の正月は旧暦の関係で、だいたい新暦の1月の下旬か2月の中旬の間にあたる。正月が近付くにつれ、一部分の会社は従業員にボーナス以外に魚や肉を支給する。普通この手に入らないものをもらうことは、従業員にとって、年末の楽しみの一つになっている。しかし，支給品とボーナスのないところもある。かれらは自分でデパートから、配給の魚、たまごを買ってきて、外の「天然冷蔵庫」で冷凍保存する。

大連人の正月の食物の用意は、餃子を除いて、大晦日の前に済まなければならない。この時、各家庭では、魚や海老の天ぷら、肉だんご、野菜コロッケの作りにおおわらわ。この習慣は、正月連休の間に母親を休ませ、家族とともにゆっくり遊ぶようにすると共に、普通より多い正月の来客をご馳走するのにすぐに盛りたくさんの料理をだせるようにするためである。

大晦日の夜、なくてはならない食べものの一つは餃子である。この餃子は旧年が終わり、新年到来の夜に食べるのが一番良いと言われる。また12時になると家中の人が一斉に外へ出て、大量の花火や爆竹を同時に打ち上げる。この時、都市全体は花火の光と爆竹の爆発の音につつまれ、話し声すら聞こえなくなる。近年来、中国人の生活水準の向上に従って、年ごとにこの正月用の爆竹の消費量が増え、各家庭のこの方面の支出はだんだんとエスカレートした。そこで花火爆竹による火災、やけども増えて、また発生した硝煙は都市の上空を覆い、空気中の酸素は減ってしまう。

爆竹をならした後、家の人々はまず両親や年長の人に正月の挨拶をする。「過年好」（新年おめでとう）、子供たちは大人にこう挨拶すると年玉がもらえる。近年来、インフレによって年玉の相場も変わった。

大連市には神社や寺がないので、御参りはしない。正月の間にごちそうを食べ、麻雀やトランプで遊び、互いに正月の挨拶をかわすことは正月の日課である。年が明けて一日の朝から人々はまず隣同志や会社同志で新年の挨拶をかわす。近くの人ならお茶、果物、菓子類で挨拶に訪れてきた客を招待するが、遠くから来たお客さんにはさらにごちそうでもてなす。一般的に、一日、二日は特別の客や親戚を除いて、ほとんど他人の家で食事はしない。皆はこの両日間を形式上の新年挨拶の訪問日と見ている。だいたい三日、四日は会社の上司や一番よい仲間を招待する日になっているが、年上や上司の家を訪ねる時は、酒、たばこ、食料品をお土産で持っていくと喜ばれる。以上は、いちおうの大連人のお正月の過し方である。

ネパール王国

Mana Baba Shrestha
大阪府立大学経済学研究科修士課程

ネパールは、ヒマラヤ山脈中部の南半を占める立憲君主国である。国の北は中国のチベット地方、南はインドに隣接し、西から東へ細長く延びている。海抜では一番低いところが約300mt、高いところは、サガルマッタ「エベレスタ」8848mtである。国の面積は14.1万㎢（北海道の約1.8倍）で、人口は約1700万人である。ところで面積の約30％は雪山で、約50％は山地、そして残りの約20％が平地である。このように国土の大部分が山であること、その中でもサガルマッタ山は世界一の高い山として有名である。

ネパールは平均的に海抜が高くても、緯度でみれば日本の沖縄より南になる。しかしその小さな国の中に世界の気候がある。それは寒いところもあれば、温暖なところ、亜熱帯のところもある。

ネパールは地形上農業国であり、国民の約90％が農業に従事している。主な産業としては観光、ジュート製品、精糖であり、その他資源には主なものとして石英、森林、ジュート、米、穀物等をあげられる。

ところで、ネパールは歴史上一度も植民地支配を受けたことがなく、約2600年前釈迦が生まれた国であることもよく知られている。また、人種、言語、風俗習慣を異にするさまざまな民族から成ること等がこの国の特徴でもある。

宗教は大きく分けると、ヒンズー教と仏教があり、ヒンズー教、仏教の聖地はほとんどネパールにある。

ネパールと日本との係わりは、古代日本に仏教が伝来したときに遡るでしょう。釈迦の誕生の後、仏教がインドに普及し、始めに中国、韓国を経て六世紀に日本に入ってきた。そして北インドの神話が日本のカナに深く関係していることも事実でしょう。

What Is Brazilian Culture ?

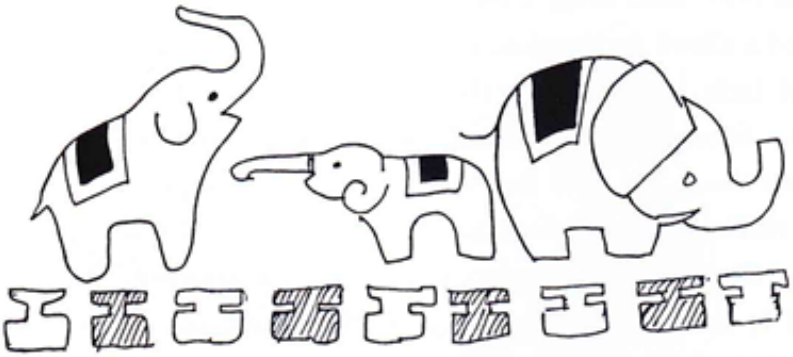
Sarkis Sergio Kaloustian
Kyoto University Faculty of Architecture

What we have is a real mixture of traditions from a lot of diferent cultures from very diferent parts of the world. In the north part of Brazil we have strong African culture that was introduced by the slaves. African rituals and music can be seen today as the black population of Bahia state is around 70% of the total. As another extreme we have the German colonization in the south. There we can see typical German style wood houses, food, and of course, beer festivals. The area of São Paulo and Rio de Janeiro received great number of immigrants from Portugal, Spain, Italy, Japan, and more recently, Korea and China. And this melting pot culture had big influence in my desire to study in Japan. The Japanese colony in Brazil is very big. 80 years ago the first immigrants came to work in the farming activity. Today, the third and fourth generations of Brazilian Japanese are spread everywhere. They have an important role in the economic and cultural development of the country.

In my early days I had always contact with Japanese people, and one experience is unforgettable. I had visited a Japanese family with my older cousin. I was feeling unfamiliar to see so diferent people for the first time in my life. But my biggest surprise was when the "obasan" opened the refrigerator and showed me an enormous octopus, not alive of course. I can say I was really frightened. But I was lucky that I did not have to eat it. Today I love "takoyaki".

At the university, I had contact with Japanese architecture and Japanese culture, through teachers and friends. I started to be very interested to study in Japan, so I tried Mombusho Scholarship for the first time in 1979. After seven years, finally I got it and came to Kyoto University in 1986. This example shows' how in Brazil you are exposed to very different cultures and the way that we react to this fact depends of the individual necessity to learn things from another countries. The typical image of my country is still soccer, samba and Carnival. I have to confess that I was disapointed in the beginning of my life in Japan. People had only a small and old, very old image of my country. But after I could understand this fact. This is universal. Brazilians have that old image that every Japanese has a camera and is master in Karate. And in this way every people have a wrong and old image of other people. Here the necessity to international cultural exchange, in the type that Rotary Club of Japan promoters through scholarships and other cultural programs.

From April 1989 I became a Rotary Yoneyama Scholarship student and this permitted me excellent conditions to continue my studies about Kyoto and its urban structure. When I finish my researches and come back to Brazil, I hope to continue in close contact with the cultural activities of the Rotary Club and to spread some aspects of Japanese culture that I could see in my stay in this beautiful country. We, Yoneyama Scholarship students have to thank very much to our Rotarian friends for giving us such a precious opportunity.



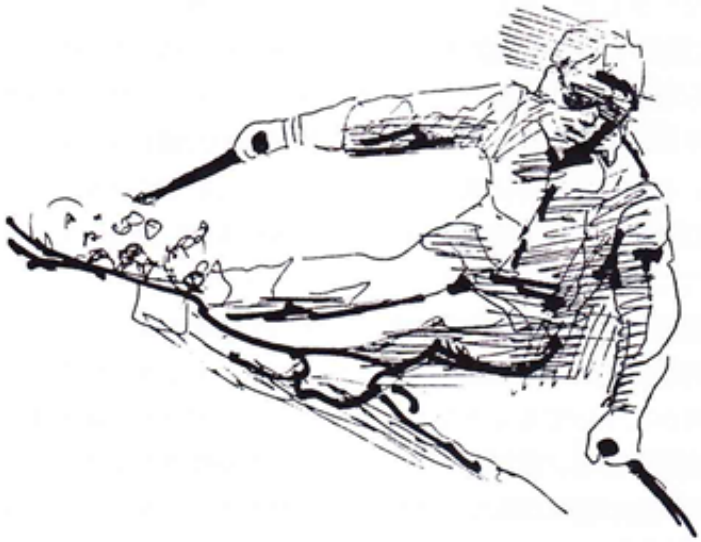
India

Ajay Sharma, (M－2)
B 408, Murasakino R.C KYOTO.

India has a long history of over five thousand years of human habitaion. The climatic contrasts, the varied landscapes and the widely divergent environmental conditions of India accounts for the magnificence of its flora and fauna. India is the seventh largest and second most populous nation of the world. The mainland of India stretching 3,214 km from north to south between extreme latitudes and 2,933 km from east to west between extreme longitudes. It covers the area of 3,287,263 km. On this 2.4% of the earth's surface live about 15% of the worlds people, and they live in a variety of social, economic and geo－physical conditions. Unity in diversity is beauty of India. After independence in 1947 it appeared as a democratic country and the constitution of India came in to force on 26th Jan 1950. India being a secular country does not have any state religion. The State of India allows for freedom of faith, worship and religion. Among the major religions of India, Hinduism is the largest and followed by about 82% of the total poputation. Second lartgest is Islam, about 11%, followed by Christianity about 2.5%, then Sikhism about 2 %, then Buddhism and Jainism less than 1 % each. The fact that as many as 1652 languages and dialects are spoken in India, the constitution recognizes 15 major languages. Hindi, which is not spoken by all but a large majority of the people and, understood by most of the people, is the national language. English is an associate language. India is a union of 25 states and 7 union territories and follows the parliamentary form of the government. Representatives or the members of the parliament are elected through general elections, which occurs every five years. Later those elected members select their leader, who becomes the prime minister. The minimum age to vote is 18 years. Every Indian state has a state government which works under the guidance of central government.

Despite facing population and illiteracy as two major problems, India has made remarkable progress in the field of science and technology, industry, atomic energy, defense technology, space research programs etc. In order to achieve the national goal of self reliance the country has concentrated on developing its own natural and human resources. Today India not only produces heavy machines for industries, transport vehicle, Railway engines, Ships, and most of its defense required items including fighter planes etc, but also possess high technology in the field of electronics, generation of atomic power, and space technology. The first Indian satellite was launched in 1975. Today nation wide T. V programs are telecasted through Indian made satellites.

Number of historical places, national parks, hill stations and coastal spots have attracted a large number of foreign tourists, variety of culture, traditional arts like yoga and dances have also been enjoyed and appreciated. Tourism has become a fast growing industry. Due to the vast size of the country and tourism on the developing stage, facilities to the international standards are not yet available in the small cities, but warm hospitality and friendly nature of Indians gives great satisfaction to foreigners. On the other hand in the big cities like Delhi and Bombay, or important tourist cities, facilities are good enough to match with international standards.



私が日本での留学生活の間に感じたことについて

郭　　信　子
大阪府立大学農学研究科博士課程

私が日本での留学生活の間に感じたことを簡単に要約します。まず第一に、日本に来てびっくりしたことは、同じAsiaとはいえ、顔の形や家の形態などが私の国である韓国と大変似ていることでした。日本に来て一番むずかしかったことはやはり言葉の問題でした。言葉の問題が解決できなくて始めは自分自身がまるであほうになった気持でした。そのむずかしい時期を耐え忍ぶことは非常に苦難でした。私の考えと感情を相手方に十分に誤解なく伝えることは大変むずかしい問題でした。そして私が今まで教育を受けた韓国のいろいろな環境と習慣が全然違う日本での生活は苦難でした。けれどもその苦難の中で私は、人間は世の中で私ひとりだけが苦難を感じながら生きているのではなく世の中のだれでも問題と苦難を持ちながら生きていることを悟るようになりました。このことは私にとって大きな教訓になりました。そして人間はむずかしい苦難を通らなければ新しい人間の再創造にならないことや、隣人を誠に愛することの重要性を悟りながら自分自身の発展のために熱心に努力しなければならないことを感じました。長い人生を生きている間に苦難が迫って来る時、その苦難に勝つために努力する精神の中に誠に生の意味があることではないかと思います。そして今までは風に揺れる葦のような軟弱な人生でしたが今からはどんな困難とむずかしさがあってもそれを勝ち抜ける強い人間に変化しなければならないと決心しました。第二に感じたことは日本の大部分の人々が勤勉だと思います。しかし、今はだんだん個人主義的な傾向があることに対してすこし残念な事だと思います。経済的な発展に伴って精神的な発展が一緒になり立ったらいいと思います。人間がなぜ生きているのか、また人生とは何かについてもっと深刻に考えることができる心の余裕を持ったらいいと思います。我々人間は結局、霧のようなはかない人生を生きていると思います。しかし、この人生を高貴な人生に自ら作って行かなければならないと思います。そのためには何よりも自分自身の厳しい努力がなければならないと思います。そして人格の陶冶も必要だと思います。人格の陶冶と共に毎日の生活が聖なる心と謙遜な態度を持って生活しなければならないと思います。人間はパンだけで生きるものではないからです。結局、人生はVisionと目的意識を持って生きるのが重要だと感じました。

以上のように筋が通っていないと思いますが日本での留学生活をしながら感じたことを要約してみました。

新時代 (New Era, New Age)

米山学友会（関西）
幹事長　魏　　栢良

人類の歴史上、特に近代以降、「新時代」と呼ばれた時期が数回あったと思う。政治、経済、軍事体制の変化が、国内的及び国際的に起こるたびに、新聞、テレビ等を中心とするいわゆるマスコミがうたう文句である。しかしマスコミがうたう文句としてかたずけるわけにはいかない。それら新時代は確かに、我々の住む人類社会に紛れもなく大きな変化をもたらしているからである。

新時代といわれる政治、経済、軍事体制等における変革の中で、人々はそのたびに新しい社会構造に飲み込まれ、引っ張られ、流されて生きてきたと思われる。そのような潮流の中で、その波のうねりに飲み込まれながらも、人々は様々な風俗や慣習を生み出し、年月を経てその時代の文化として定着させ、ひとつの時代のシンボルとして後世に引き継いでゆくのである。

ひとつの時代はその時代を生きる人々の衣食住はもちろん、言語、思想、生き方さらに生きがいにまで影響を及ぼす。人々はその時代の要求する生き方を強いられる。その時代の流れに沿うように生きなければならないのかもしれない。今、過去を振り返ってみると、新時代と呼ばれたその時々に人々は、人として、人らしく、人のために、人が生きる人の時代を築いてきたといえるだろうか。人々はその流れにただ流されて生きてきたのではないだろうかと思う。

本稿の「新時代」は、たとえば東・西の軍事、政治体制の変化によることだけでなく、新世紀すなわち21世紀が目前に待ち受けていることに目を向け、次の世紀の意義と希望に重みをおきながら、私の願いをこめたい。

21世紀の新時代は今までにない大きな流れが到来してほしい。それはつまり一民族、一地域、一体制、一国家といった従来の枠組みから離れ、人類、地球、宇宙といった規模から「人類の平和共存共生の道」を考えることである。いま人々は地球的規模の諸問題に取り組まねばならない時期にきている。このまま旧態依然の流れに甘んじていると、本当の人類の新時代の到来を迎えることができないかもしれない。

地球及び宇宙の環境を含む諸問題に関しては次回にまわすことにし、今回はまず人類の問題、特に第三世界の子供たちの現状について述べることにする。

国連児童基金（UNICEF)の1989年度の白書によると、1日に免疫処置をうけることができなかったことが原因で、8,000人の子供が死んでいく。また下痢による脱水症で7,000人、肺炎で6,000人の子供がそれぞれこの世を去っているのである。つまり1日に21,000人の子供が死んでいるということである。1年間には数百万人の子供達が予防や治療の可能な病気で命を失っているのである。

この白書によると、このままほっておくと90年代には1億人の子供達が亡くなるであろうと警告している。

この子供達を救うには25億ドルが必要であるということである。この金額は確かに大金である。しかしこの金額は軍拡面での発展途上国が浪費する金額のわずか２％にすぎないのである。そしてソ連の１年間の酒（Vodka)代にすぎないし、またアメリカのたばこ産業の販売促進のための年間広告費用にすぎないのである。

予防接種のためのワクチン代は一人当たり1.5ドルであり、下痢による脱水症の治療であるロ腔水化合薬（oral rehydoration medicine)の費用は１ドルぐらいということである。

子供達を救う資金はないといっておきながら、軍備拡張のためには、子供をすくうための金額の約50倍もの費用を費やしているのである。

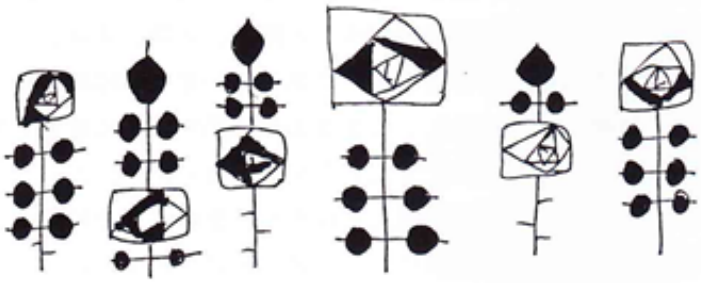
人は人としての良心を持っているとは言われているものの、上記のことを考えると現在の我々は本当に真の人としての良心を持ち、それを行動の中で具体化しているといえるだろうか。21世紀の新時代においては、人の良心を真に生かし、人類の愛と平和の風が東西南北のどの国にも吹いてほしい。いや、吹かせなければならないのである。

人類が人類を救わずして、だれが人類を救い、生かせるだろうか。

物質を重んじ、物質のための物質の世界に終止符を打ち、人類愛が四季を通して芽生える新時代の到来を心の底から待ち望んでいる数億人の人々がいる。

そしてこのような時代だからこそ、「真に良心を生かせる人」になれる機会が我々に訪れているともいえるのである。

21世紀の新時代には「お互いの友情とそのための奉仕」をする、つまり米山梅吉翁の精神を生かせる指導者が数多くうまれることを両手を合わせて待ち望まずにいられないのである。



1989年度懇親会報告

於奈良の柳生里

米山学友会（関西）
幹事　黄　承国

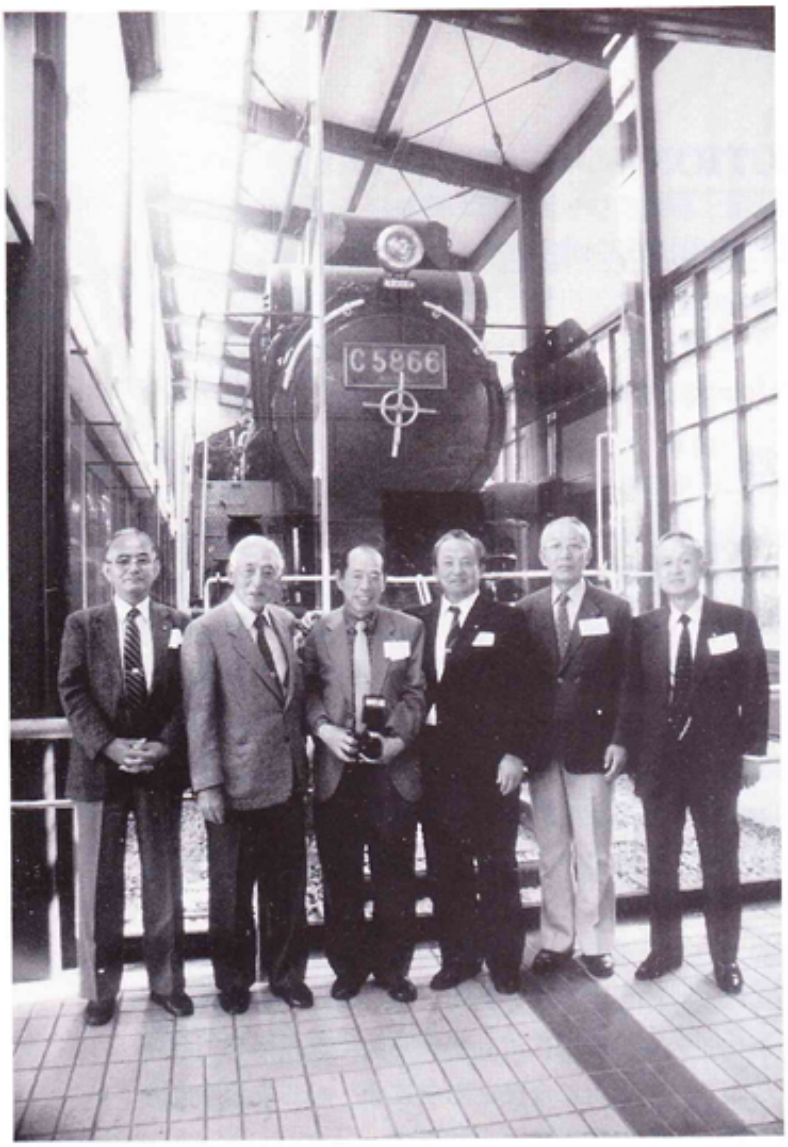
米山学友会（関西）は去る11月26日午前10時より奈良の柳生里に於いて、見学会およびレクリエーションを通じての交流会を行いました。

初めての郊外での交流会であったためロータリアンと学友会の会員の参加はあまり多くはなかったのですが、その日の参加者たちは自然での素晴らしい一日を過ごすことができたと思います。

午前10時に近鉄奈良駅の前の噴水広場での受付が約30分位行われ、10時30分頃には参加者全員バスに乗り、目的地である柳生里の方を向かって出発致しました。久しぶりに典型的な田舎の雰囲気のある光景を眺めることができて、参加者たちの視線はいそがしくなりました。狭い道を40分くらい走ったバスは我々の目的地である柳生里につきました。バスから降りた我々は自然の中の新鮮な空気を吸いながら芳徳寺、正木坂道場、旧柳生藩家老屋敷などを回りながら、柳生家にまつわる史跡にふれる楽しみを感じることができたと思います。

最後の集結地である柳生公民館では、昼食とレクリエーションが行われました。重光世洋会長からの挨拶および今回の交流会の主旨についての説明からはじまり、ロータリアンとして唯一人参加して頂きました山本康雄（T－265・平城R.C）さんからのごあいさつの言葉と乾杯の音頭により昼食の時間に入りました。会長さんが用意してくれたおいしい弁当も自然の中ではもっとおいしくて久しぶりに学生時代の遠足みたいな気持ちを感じました。レクリェーションの時間には風船破りゲーム、パートナー捜しゲームをやりました。最後の宝物捜しは参加者のほとんどにプレゼントがあたるように行われました。時間を忘れるほど大人も子供も夢中になりました。短い時間でありましたが、参加者はお互いを知る機会になり、これにより自然な国際親善への道を学ぶのではないかと思います。

最後に、米山記念奨学会ならびに奨学生のお世話をいただいているロータリークラブの皆様に対し心より深くお礼申し上げるとともに今後とも学友会へのご支援を宜しくお願い申し上げます。



米山奨学生学友会「松下電器」見学会

米山奨学生学友会「奈良」柳生屋敷旅行

米山奨学生学友会（関西）の1989年度活動報告

1．主な行事

○行　　事　米山奨学生学友会（関西）89年度総会
ホ ス ト　米山奨学生学友会（関西）
日　　時　1989年5月27日（土）
場　　所　ホテル南海
参加人員　100名
内容紹介　挨拶、学位取得者への記念品および学友の記念章の授与、各報告、役員の選出及び承認、新入生歓迎会（中国の奨学生も参加）

○行　　事　米山奨学会レクリエーション
ホ ス ト　R．I　第266地区
日　　時　1989年11月5日（日）
場　　所　大阪城公園ホール隣の「集」
参加人員　学友会から30名
内容紹介　TWIN BLDG NATIONAL CENTER見学、挨拶、食事（しゃぶしゃぶ）、カラオケ大会、記念撮影、水上バス（アクアライナー）遊覧

○行　　事　米山奨学生学友会（関西）89年度懇親会
ホ ス ト　米山奨学生学友会（関西）
日　　時　1989年11月26日（日）
場　　所　奈良の柳生里
参加人員　40名
内容紹介　柳生遺跡見学、挨拶、食事、ゲーム、記念撮影

2．役員および大学代表の集りにより、10月28日の1989年度交流会について協議をもった、その日米山奨学生学友会（関西）の会報の編集委員会も開き、第5号の構成についての協議をもった。12月19日の編集委員会では、会報の印刷所に寄り会報第5号の実際的な構成を行った。

3．米山奨学生学友会（関西）の会報についての内容紹介

第4号
国際理解を目指す試みの一環による自由テーマ（留学生と大学および先生との相互理解）

第5号
国際的な文化の理解を目指す試みの一環による自由テーマ（私の国、故郷の自慢や文化）

米山学友会幹事（親睦）
黄　承国　[堺R．C]

米山学友会　　NEWS

○　第二回関西地区大学対抗留学生日本語ＤＥＢＡＴＥ　ＣＯＮＴＥＳＴの参加結果について

上記の催しが下記のとおり行なわれ、本学友会会員である、

李　静淑さん（経済学研究科修士課程・韓国）

石　若一さん（経営学研究科博士課程・中国）

の二名が大阪市立大学代表として参加されました。

記

1．日　時　　1989年12月16日（土）　13：00～17：00

2．場　所　　大阪国際交流センター（２Ｆ）桜の間

3．テーマ　　「日本は外国にもっと門戸を開くべきだ」
－貿易・雇用・企業活動について－

4．主　催　　大阪国際交流センター・第一生命・大阪市役所

5．参加校　　大阪大学・大阪市立大学・大阪外国語大学・京都大学・関西学院大学・関西外国語大学・奈良女子大学・同志社大学・京都外国語大学・竜谷大学（10校）

結果、惜しくも最優秀賞は逃しましたが、優秀ｄｅｂａｔｅｒ賞（賞金五万円）を獲得しました。

○　第６号の原稿をお待ちしています。

学友会会報を全会員および関係者の皆様の対話の広場にしたいと考えています。
つきましては次の要領でご投稿をお待ちしています。
ご協力をお願い申し上げます。

テーマ：私の国、故郷の自慢や文化等
：国際交流及び人際親善に役立つ話
などなんでも結構です。
（原稿用紙400字　３枚程度）

送り先：〒567
大阪府茨木市新郡山１－12－302
魏　栢良
（Tel 0726－43－6158）

《米山記念奨学会に対する意見》－アンケート調査

米山学友会（関西）
幹事　千　文奉
大阪府立大学経済学研究科博士課程

今回米山奨学生学友会（関西）は、今後より有益な活動とともに、奨学生とロータリーアンとの交流を一層深めていくために、関西地区の現奨学生に米山奨学会の制度および交流、そして米山奨学生学友会に対するアンケート調査を行なった。1989年10月１日から10月30日までにアンケート調査紙を115人に送った。回答者の数は82人で、全体の71.3％であった。

アンケート調査の内容は大まかに、①米山奨学会について②奨学金の受給について③ロータリーアンと奨学生との交流について④米山奨学生学友会（関西）について⑤米山奨学生に対して、の５項目に分類した。

図１　奨学金の受給期間

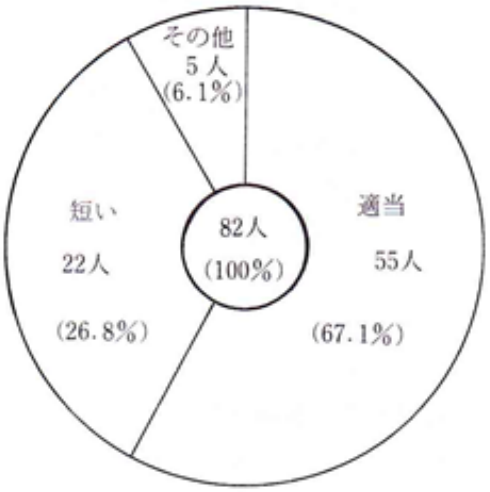


図２　奨学金額

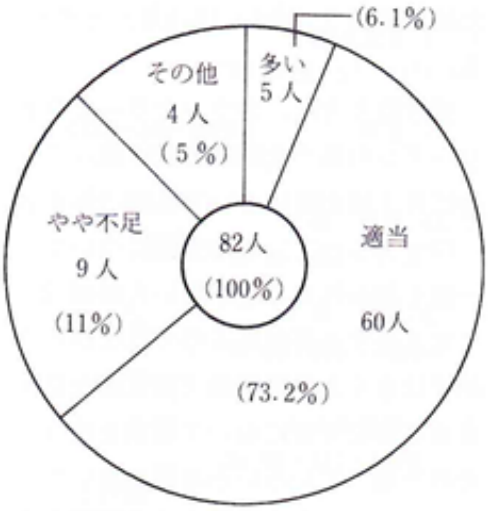


図３　例会に月１回の出席

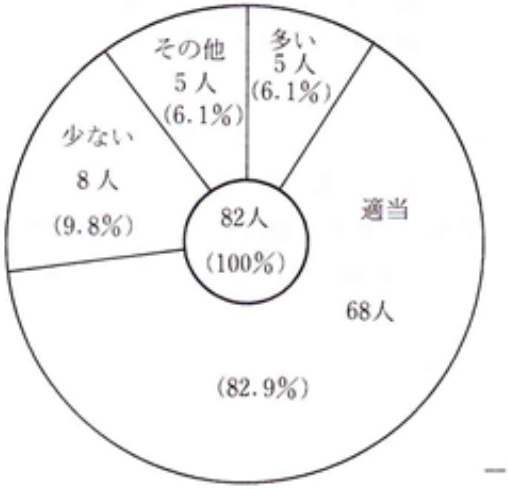


図４　ロータリーアンの家庭に招かれた回数

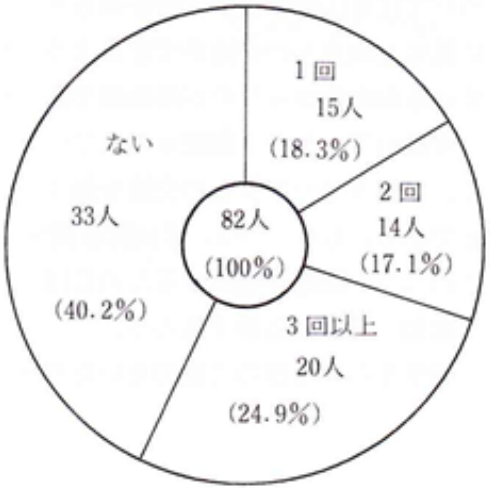


図5　米山奨学生学友会(関西)を知った経路

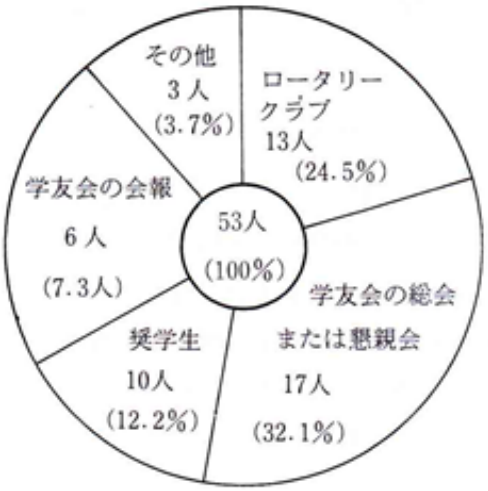
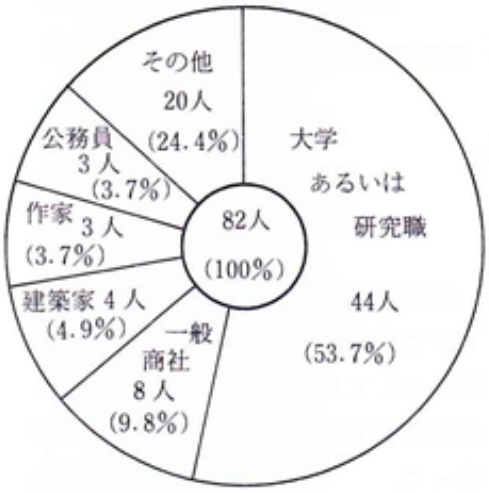


図6　将来就きたい分野



まず、奨学金の受給時期については、図1で示しているように、適当であると答えた人は55人（67.1%）で、短いと答えた22人（26.8%）をはるかに上回っている。受給金額についても適当であると答えた人が圧倒的に多い（図2）。これは今期30,000円アップされた結果であり、多い（6.1%）とやや不足（11%）はそれぞれ未婚者と既婚者の答えである。

受け取り方は、カウンセラーより直接手渡されている人（60%）が、例会の際にロータリーアンの前で公開的に受け取っている人（40%）より少し多い。さらに世話クラブの例会に月1回出席については82.9%が適当であると答えた。（図3）

ロータリーアンとの交流については、図4にみられるように真の交流がもっと望ましい。一回も招かれたことがない人が40.2%も占めているということは、これからの交流について考え直す必要があるのではなかろうか。具体的な交流方法については多くの人が、形式的ではなくより現実的で実質的な交流が欲しいと答えている。例えば、ロータリーアンはさまざまな分野において職業を持っている。奨学生はそれらの職場見学をより多く望み、それを通じていろいろな面において役に立てたいと思っている。日本人の家庭を直接みることによって本当の日本人の習慣や風習を知り、理解を深め合うことができる。

米山奨学生学友会（関西）を知っている人は全体の64%にすぎない。また米山奨学生学友会が発行している会報を読んだことがあると答えた人はわずか半分である。その理由については米山奨学生学友会を知るきっかけがなく、会報を手にいれることが難しい。最後に奨学生同志との交流ができるように奨学生の集いの場をもっと増やして欲しい、と答えている人が多かったのが印象的であった。

今回のアンケート調査からは二つの大きな課題が得られた。一つは、奨学金だけではなく、ロータリーアンとの交流を強く望んでいること、そして真の交流が求められていることである。もう一つは、米山記念奨学会学友会（関西）に対する期待が大きいことである。この二つの課題を達成するためには、ロータリーアンの配慮と米山学友会の会員の積極的な参加、活躍が必要であろう。

奨学生のみな様のご協力をいただきまして本当にありがとうございました。

米山奨学生学友会（関西）役員名簿

1989.11.

会　長	重光　世洋	〔大阪産業大学工学部：Tel.0720－75－3001〕	〔大　阪R.C.〕
	〒630　奈良市七条西町1－11－19		Tel.0742－~~74－5004~~ 63－1732
副会長			
（D－265）	清河　雅孝	〔京都産業大学法学部：Tel.075－701－2151〕	〔京都東R.C.〕
	〒607　京都市山科区御陵牛尾町72－7		Tel.075－594－2029
（D－266）	文　燕友	〔帝塚山短期大学〕	〔大阪平野R.C.〕
	〒658　神戸市東灘区向洋町中5丁目5番地533－914		Tel.078－857－2679
（D－264）	林　錫璋	〔桃山学院大学経済学部〕	〔名古屋西R.C.〕
	〒593　堺市中町8－584－7		Tel.0722－62－4633
（D－268）	荘園　福松	〔税理士〕	〔神　戸R.C.〕
	〒530　大阪市北区鶴野町4 コーポ野村梅田A－216		Tel.06－375－1070
幹事長	魏　栢良	〔大阪市立大学法学研究科〕	〔大阪平野R.C.〕
	〒567　大阪府茨木市新郡山1－12－302		Tel.0726－43－6158
幹　事			
（庶務）	千　文奉	〔大阪府立大学経済学研究科〕	〔堺泉北R.C.〕
	〒591　堺市百舌鳥赤畑町3－191 弘倫荘		Tel.0722－57－4458
（親睦）	黄　承国	〔大阪府立大学工学研究科：Tel.0722－34－5379〕	〔堺R.C.〕
	〒593　堺市百舌鳥梅町4－804		
（学術）	大塚　賢龍	〔甲子園大学〕	〔堺　東R.C.〕
	〒532　大阪市淀川区三津屋北1－6－20		Tel.06－301－3358
（国際交流）	Dileep Chandralal	〔神戸大学文化学研究科〕	〔堺　西R.C.〕
	〒560　豊中市本町1－5－17		Tel.06－854－7434
	許　紫芬	〔甲子園大学〕	〔大阪東R.C.〕
	〒550　大阪市西区江ノ子島1－8－21－411 クローバーハイツ江戸堀		Tel.06－445－1090
（会計）	韓　美賢	〔大阪市立大学文学研究科〕	〔大阪阿倍野R.C.〕
	〒558　大阪市住吉区刈田9－2－18アビコビル313		Tel.06－698－3039
（書記）	呉　淑芬	〔コウベルコ科学研（株）〕	〔神戸須磨R.C.〕
	〒650　神戸市中央区山本通2－13－10		Tel.078－221－5160
会計監査	豊田　秋雄	〔豊田歯科病院Tel：06－308－5177〕	〔大阪西南R.C.〕

米山奨学生学友会（関西）各大学の代表

1989.11.

京都大学 （法学研究科）	范姜　真徴 〒562　箕面市瀬川４－23－23　３室	〔京都山科R．C．〕 Tel.0727－22－3090
京都市立芸術大学 （美術研究科）	金　美貞 〒540　大阪市中央区神崎町２－15 シンポニーアネックス602	〔阪　南R．C．〕 Tel.06－765－6172
大阪大学 （理学研究科）	許　天維 〒675-23　川西市小戸３－12－５　平賀 方	〔箕面中央R．C．〕 Tel.06－844－1151．内4090
大阪市立大学 （文学研究科）	裵　貞烈 〒558　大阪市住吉区我孫子４－９－12 南野文化２階２号	〔大阪鶴見R．C．〕 Tel.06－692－7910
大阪府立大学 （工学研究科）	鄭　錫贊 〒593　堺市土師町2675　一瀬様 方	〔和歌山東R．C．〕 Tel.0722－43－0787
大阪女子大学 （文学研究科）	朴　眞華 〒591　堺市百舌鳥夕雲町２丁130みささぎ荘２Ｆ11号	〔堺泉北R．C．〕 Tel.0722－47－2143
神戸大学 （文学研究科）	林　珠雪 〒650　神戸市中央区港島中町３－１－55－705	〔大　東R．C．〕 Tel.078－302－5848
大阪芸術大学	江　唯徴 〒556　大阪市浪速区元町３丁目６－４	〔堺東南R．C．〕 Tel.06－649－5586
関西大学 （文学研究科）	莫　素徴 〒565　吹田市千里山西５－６－27　華山 様方	〔箕　面R．C．〕 Tel.06－385－8852
同志社大学 （経済学研究科）	劉　美京 〒604　京都市中京区西ノ京上平町84番地　畑 様方	〔京都山科R．C．〕 Tel.075－811－9526

編　集　後　記

「一は善」という発想は、いつのまにか共通の認識として我々の生活に深く浸透している。たとえば一つの国家が一つの文化からなり、社会的に同質であり、人々が一つの国家として一体性を確立していることが理想的であるかのような思い込みが我々にはある。「一つ」であること、「同質」であることに最高の価値をおく世界が持続する限り、「二」や「多質」並びに「多元」を認める理念は存在しにくい。

「一」を「善」とする理念は、自由世界での人間存在を否定し、世界の未完成をまねく「悪」ともなりかねない。この理念が人間同志の対立を呼び、ひいては戦争をも引き起こしているという事実を歴史が証明している。

「一」と「二」、「同質」と「異質」、つまり「多元的」になりたつ世界こそが「善」であり、「美」であり、「真」であると思われる。多様性が受け入れられる世界こそが、その世界を構成するひとりひとりにとっての、本当の意味での平和をもたらすのではないかと思われる。

以上の願いを込めて、本号では多くの方にご協力を願い、できるだけ多くの文化及び慣習を紹介するように努めた。快く執筆を引き受けてくださった方々にはこの紙面をかりて、感謝の意を表したい。

また本号の発行にあたって、財源確保のために、広告を載せることにした。さいわい大阪難波R.Cの久保忠義様のご協力により、同R.Cロータリアンの谷口　勉様、段　為梁様、竹久　勇様、今川　隆様からご援助を賜わった。さらに大阪堂島R.Cの西野公庸様からも暖かいご援助をいただき、全学友会員を代表して心からお礼を申し上げたい。

今後も編集委員一同、力をあわせ、より一層内容のある会報にしてゆきたいと思っている。最後に本号における編集委員一同の主旨が皆様の国際理解へのひとつの参考になればと願っている次第である。

編集委員代表
魏　　栢　良

編集委員
文　　燕　友
許　　紫　芬
黄　　承　国
千　　文　奉
魏　　栢　良

★あなたが守る、あなたの歯

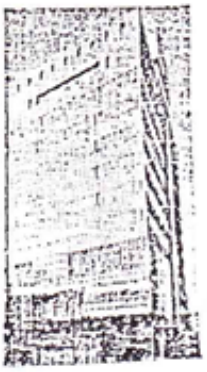
★歯は命　一生自分の歯で食べよう

大阪市中央区千日前２丁目５－７
歯科センタービル４階

谷口（勉）歯科診療所
TEL(06) 644－0330
（大阪難波ロータリークラブ会員）

難波御堂筋ビル

NAMBA MIDOSUJI BUILDING



光明興業株式会社
大阪市中央区難波４丁目２番１号 〒542
Phone 06－231－8055

3F～5F　光明健康倶楽部
Phone 06－643－7757

2F　Café de la Paix
カフェ・ド・ラ・ペ
Phone 06－644－1248

代表取締役 段　為梁
（大阪難波ロータリークラブ会員）

●21世紀のテレコミュニケーションを拓く……

株式会社
テレトロニクス
TELETRONICS

代表取締役 竹久　勇
（大阪難波ロータリークラブ会員）

本店　〒596 岸和田市加守町４丁目29番33号
☎0724－43－2340（代）　FAX0724－43－3498
大阪営業所　〒557 大阪市西成区岸里東１丁目15番１号
☎06－647－3931

おだやかな ぬくもり

この冬ファッションの主役は〝あなた〟
ヒカリが最新の流行情報をお届けします。

LADIES' ヒカリ
本店・大阪なんば戎橋筋

本店・大阪市中央区難波1丁目8番3号　TEL (06)211－5141

今川　隆（大阪難波ロータリークラブ会員）

米山奨学生学友会（関西）会報第５号

1989年11月26日　発行

発行者：米山奨学生学友会（関西）
〒630 奈良市七条西町１－11－19
重　光　世　洋
Tel　0720－75－3001

印刷所：昭文堂印刷株式会社
〒531 大阪市北区豊崎２丁目11番８号
Tel　06－372－0071

ROTARY YONEYAMA SCHOLARSHIP ALUMNI ASSOCIATION